

2021 年 2 月 22 日竹島の日

第0回 八雲立つ出雲から

「平和・環境・健康はひとつ」国際 Zoom シンポジウム

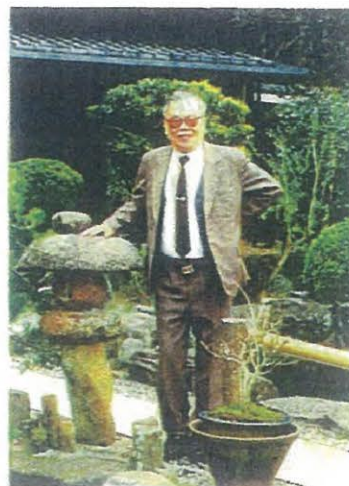
関連重要資料



小松電機産業株式会社 人間自然科学研究所

黙々と友好の畑を耕す

中日民間文化交流センター主任 張碧清



今年は中日国交正常化三十周年である。三月初めごろ、私は招かれて、三十周年記念のあるイベントに参加するため日本へ行った。あちこち見学し、そこで見聞したことや感じたことを述べてみたい。

あるので、国交正常化を勝ち得るのは容易なことではなかったことを私はよく知っている。

三十数年前、松村謙三や高橋達之助ら日本の見識ある人たちは、七十歳を超す高齢にもかかわらず、千里をものともせず、はるばる海を越え、何回も中国にやってくる、夜を日に繼いで会谈に臨んだ。そのおかげで一九七二年に、やっと成果を見ることができた。今年の国交正常化三十周年に際し、往時をふりかえり、中日友好の井戸を掘った先輩たちに心からの感謝の意を表したい。

これらに見識ある先輩たちは

友好の井戸は枯れず

一九五〇年代の中ごろから六〇年代の中ごろまで、私は中国人民外交学会で働いていた。当時、外交学会は日本の政治家を接待する唯一の窓口であった。国交を正常化するための準公的な会談の一部に参加したことが

あいついで世を去った。今日の中日関係にはたびたび波乱や曲折が現れる。中日友好の事業には後継者がいないのではないかと皆が心配している。しかし今回の訪日で、後継者がつぎつぎと出て来ているのを知り、励まされた。後継者の中には、よく知られている友好人士もいれば、世には知られていないが、黙々と中日友好の畑を耕している人々もいて、実に敬服に値する。

島根県の小松電機産業の社長で、「人間 自然 科学研究所」の所長でもある小松昭夫氏は、後者の代表的人物である。彼はずっと中日の平和友好や文化交流を促進する事業を一つずつ、地に足をつけて実践してきたのだ。

ここ数年、小松氏は積極的に近隣諸国との文化交流を進めてきた。日本人の歴史に対する認識は、アジアの人々とかなり差があることを知っているため、小松氏は将来に対して強い不安を感じている。こうした歴史認識はすべて、軍国主義と関係があると思っている小松氏は、「国家主義と軍国主義が捲土重来してくるのを絶対許してはならない」と大声で呼びかけている。花が一輪だけ咲いても春ではない。無数の花々が咲きそろう

筆者と小松昭夫氏
(左から2番目)



てこそ存なのだ。全社員の教育のため、二〇〇一年五月、小松氏は全社の百人近い社員を率いて訪中し、南京大虐殺記念館や盧溝橋の中国人民抗日戦争記念館に行き、歴史を学んだ。彼は「前事の忘れざるは、後事の師なり」という精神に基づいて歴史を学び、現実を直視し、中日両国の子孫や世界人類の未来のために平和を守る努力をしなければならぬと言っている。企業の社員全員が歴史を学ぶため中国へ見学に来たのは、小松電機産業が初めてであるといわれる。その目的は、自社の社員を教育するだけでなく、さらに多くの人々が後からやって来るようになればいい、と小松氏は期待している。

小松氏は山東省棗莊にある台兒莊大戦記念館を参観したとき、二〇〇三年が台兒莊戦役の六十周年なので、盛大な記念のイベントが催されることを知った。一九三八年、小松氏の故郷である島根県と隣の鳥取県の両県民によって編成された松江六三連隊がこの戦役に参加した。この戦役で中国に巨大な損失をもたらした罪を贖い、平和を祈念するため、小松氏は棗莊市と共同出資して、「台兒莊平和記念碑」を建てることを提案した。現在、中国側は建設する場所を選定し

ているところだ。設計については棗莊市政府と小松氏が相談して決め、来年の四月には完成する予定だという。中日が共同に出資し、中国に平和記念碑が建てられるのも初めてのことである。

中日両国の間では、靖国神社問題がずっと中日友好関係をかき乱す大きな要因となっていた。それは、なかなか直らない疾病のような問題だ。それを解決するため、日本ではいろいろな提案があつたが、小松氏の提案は非常に独特である。それは島根県と鳥取県にまたがる中海のほとりに「永久平和記念碑」を建てようというものだ。

日本軍国主義の侵略する矛先は、まず朝鮮半島と中国に向けられた。朝鮮半島や中国に最も近いところに平和記念碑を建てることは、平和を望む気持ちを最もよく表す特別な意義がある。小松氏の呼びかけを島根、鳥取両県民が積極的に支持し、鳥取県当局は記念碑を建てるために米子空港近くの土地をすでに用意しているという。小松氏の案内で、私はそこを見に行った。土地は広く、日本海に面している。そこで、記念碑を建てるには理想的な場所だ。この計画が実現すれば、日本と隣国との関係を改善するのに大きく役立つ。その

効果は計り知れない。

介の中小企業の経営者が、自国と隣国との平和友好事業にこれほど関心を寄せ、さらに実際に行動を起こしているのは、実に貴重なことだ。

日本でも花開く儒家文化

孔子は中国古代の偉大な思想家であり教育者でもある。孔子によって創られた儒家文化は、二千年以来、歴代の王朝に崇拝されてきた。だが、二十世紀になつてから、中国では儒家文化はジリ貧になった。だが日本では、儒家文化はずっと人気を持ち続け、孔孟の道を篤く信じている人はかなり多い。小松氏もその中の一人であり、「中庸」は彼の座右の銘である。

一九八八年に出されたノーベル賞受賞者による『バリ宣言』では「人類が二十一世紀に生存していくには、二千五百年前を振り返り、孔子の知恵を吸収しなければならぬ」と述べている。世界的な「頭脳」たちによって孔子がかくも高く評価されたことで、小松氏は大いに励まされた。一九九九年、北京で開催された孔子の生誕二千五百年記念のシンポジウムには、十数カ国の学者たちが参加した。そして「孔子の理念や教えが、現在のさま

さまざまな問題の解決に知恵を与え
る」と認定した。これは中国での
孔子の評価がさらに高まったこ
とを意味する。

儒教をもつと盛んにするため、
小松氏は山東省蒙莊に、高さ一
メートル以上もある孔子と孟子
の銅像を注文し、今年九月に島
根県に運んで盛大な除幕式を行
う予定である。

最近、小松先生が主宰する「人
間 自然 科学研究所」は、中日
英語対訳の『論語』の豪華本を出
版し、関係方面に配った。日本政
府にも百冊贈った。この本の出
版記念会を、小松氏は東京と島
根で盛大に開催した。私は小松
氏がきつとこのチャンスを利用
して、自社の製品を宣伝するの
だろうと思った。だが、まったく
予想に反して小松氏は、商売の
ことには一言も触れなかった。
その誠実さには感動した。

中日の儒家文化を比べて見る
と、まるで花は庭で咲いたが、香
りは垣根の外へ漂っていくよう
なものだ、と私には感じられる。
古代の優秀な文化の継承は、中
国より日本のほうがうまくいつ
ていると思う。

日本経済の衰退は本当か

一九九〇年代以後、日本の経

済の衰退が十年間続いているこ
とは、各種の統計にあらわれて
いる。このため一部の経済学者
は、日本の現状を「山川草木うた
た荒涼」と言わんばかりに描い
ている。

だが去年の末、イギリスのあ
るビジネスマンが日本を視察し
た。彼は最初、日本ではきつと失
業者が街に溢れ、商店には客が
少なく、人々は憂いに満ちた表
情をしているだろうと想像して
いた。しかし日本の各地を見て
回った結果、彼は驚いてこう
言ったのだ。「日本のマーケット
の繁栄ぶりは、ロンドンを上回
ることはあっても下回ることは
ない」。そして彼は「日本経済の
衰退説は虚構ではないか」と
疑ったのである。

私は十年前、日本で暮らした
ことがあり、当時の日本のマー
ケットについてよく知っている。
十年後再びその地を訪れてみた
が、その盛況ぶりは以前とまっ
たく変わらないように感じた。

十年間も経済が低迷している
というのに、なぜマーケットは
昔と同様にあれほど繁栄してい
るだろう。それは、日本経済がも
ともと実力があるからだ。今日
の日本は依然として世界第二の
経済大国の地位にある。世界最
大の債権国であり、最大の海外

援助国でもある。およそ資金援
助の必要があれば、世界の中で
真っ先に、日本に目が向くのだ。

しかも日本は、収支が均衡し
ている国の一つである。今でも、
一人当りの国民総生産(GNP)
は、先進国の中でもかなり高い。
中国では、「瘦せて死んだ駱駝で
も馬より大きい」という。日本の
各方面の状況を総合的に見て、
私は日本の経済を悲観的には見
ていない。日本は必ず、一時的な
苦境から抜け出し、再び立ち離
陸することができると信じてい
る。

国際協力で環境保護を

ここ数年、中国政府は環境保
護に対し大量の人、物、金を投入
し、かなりの成果を収めた。だ
が、日本とはまだ比べものにな
らない。今回、東京、島根、鳥取、
千葉を訪れたが、至るところに
青空と白雲があり、その明るさ
にかえって戸惑うほどだった。

島根県を視察したとき、青々
とした山の中の所々に、黄色い
木々がまるで斑点のようにある
のを偶然見つけた。そのわけを
尋ねてみたら、中国大陸から飛
んできた酸性雨のせいで抵抗力
の弱い松が枯れ、そこが黄色に
なっているのだと小松氏は説明

した。まったく恥ずかしい話だ。
中国の環境保護事業がうまく
いっていないかったため、その禍
が隣国にも及び、島根県は中国
に近いので、いち早く酸性雨の
被害を受けたのだ。

三月二十日、北京はめつたに
ないほどの砂嵐に襲われた。こ
の砂嵐は風に乗って東へ飛んで
行き、韓国と日本はその被害を
免れることができなかった。ま
ことに忍びないことだ。

しかし翻って考えると、砂漠
は連綿として数千里も続いてい
るのだから、一國だけでそれを
コントロールすることが果たし
てできるだろうか。現在の世界
は、各国の相互依存が日に日に
強まっている時代である。日本
の「国平和主義」がなかなか実
現できないと同じように、一國
による環境保護もなかなか思
い通りにはいかないのだ。

現在、日本では、中国へボラン
ティアで植樹に行くブームがお
こり、今年は中国に行く人が特
に多いと聞く。こうした活動は、
自分にも他人にもプラスになる
ことなので、大変良いことだ。日
本は環境保護の技術と資金を
持っているのだ、これから中
国や世界の環境保護に対して、
さらに大きく貢献すると私は信
じている。

枣庄日报

2002年2月 星期日

10

农历辛巳年
十二月廿九

ZAOZHUANG RIBAO

第7432期

国内统一刊号: CN37-0038 网址: WWW.ZAOZHUANGDAILY.COM.CN

韩喜凯会见日本客人

本报济南2月8日讯 今天下午,中国孔子基金会会长、山东省政协主席韩喜凯,在济南会见了以日本小松昭夫为团长的日本孔子文化代表团一行。

会见中,韩喜凯首先对客人的来访表示欢迎。他说,孔子是中国古代伟大的思想家、教育家,开创了儒家这一中国历史上最重要的思想文化派别,记载孔子主要著作的《论语》是中国思想文化发展史上最重要、影响最大的典籍之一。儒家学说博大精深,对人类社会文明进步和发展作出了重

要贡献,有着超越时代、超越国界的深远影响。

韩喜凯说,山东作为儒家学说的发源地,我们既感到自豪,也感到责任重大,应多为儒学研究做更多的工作。他对客人研究传播儒学的热情表示钦佩,希望双方携手合作,加强对孔子思想的研究与交流。

省委宣传部副部长、外事办主任王兆成,省外事办副主任、中国孔子基金会秘书长张树葵参加了会见。

(记者 张李鸿)

日中经贸交流代表团访问我市

马金忠等会见客人

本报讯 以日本小松电机产业株式会社社长小松昭夫先生为团长的日中经贸交流团一行7人,于2月9日来我市参观访问。当日下午,市长马金忠在枣庄大酒店会见了来访的客人。副市长李守义及市外办、市外经局、市贸促会的负责同志会见时在座。

马金忠在会见时说,值此中国传统佳节——新春佳节即将来临之际,我们高兴地迎来了日中经贸交流代表团的尊贵客人。在此,我谨代表枣庄市政府和全市人民,向远道而来的朋友们表示热烈的欢迎和诚挚的问候。

马金忠说,日本经济发

达,在科技、管理、人才和资金等方面具有很大优势。我们在经贸合作、文化交流方面具有良好的传统和极大的互补性。今天来访的各位,都是枣庄的老朋友,对枣庄的情况有比较深入的了解。我们热忱希望与各位老朋友,并通过大家,扩大与日本工

商、经贸、文化体育界的交流,增进友谊,加强合作,共创美好未来。

会上,代表团与我市领导及有关部门负责人就双方合作事宜进行了洽谈。

马金忠、小松昭夫分别代表市政府和代表团互赠了礼品。(记者 刘源江)

2001年8月 星期五

24

农历辛巳年
七月初六

ZAOZHUANG RIBAO

第7266期
今日八版

国内统一刊号: CN37-0038 网址: WWW.ZAOZHUANGDAILY.COM.CN

日中文化经济交流团访问我市

马金忠会见了客人 李守义陪同参观

本报讯 由日本第三回访中国文化经济交流团团长、HNS人间·自然科学研究会小松电机产业株式会社社长小松昭夫率领的日本客人一行5人,8月22日至23日在我市进行友好访问。

市长马金忠、副市长李守义、市政府秘书长杨家清在枣庄大酒店会见了日本客人。马金忠向客人介绍了我市政治、文化、经济发展情况以及招商引资的投资环境和优惠政策,感谢小松先生为双方之间政治、文化、经济交流做出的努力。

马金忠说,今年9月16日,枣庄将举办第二次经贸洽谈会,欢迎交流团介绍更多的日本朋友到枣庄来。

22日上午,日本客人在李守义的陪同下,参观了枣庄市恒力青钢艺术有限公司。李守义邀请小松先生共同为刚刚完工的雕塑孔子像揭幕。日本客人对该公司的雕塑产品赞不绝口,并当即拿出两张日本治水英雄的画像,订做巨型雕塑。

22日下午,日本客人来到台儿庄大战纪念馆。小松

昭夫,沉重地来到纪念碑前。小松先生说:“明年是日中邦交正常化30周年,日中两国人民愿意进一步加强文化、经济交流,渴望世界和平。但今天,日本国内却产生了不和谐音,日本首相公然参拜靖国神社,右翼分子蓄意修改历史教科书,激起了中国和其他国家人民的强烈愤慨。

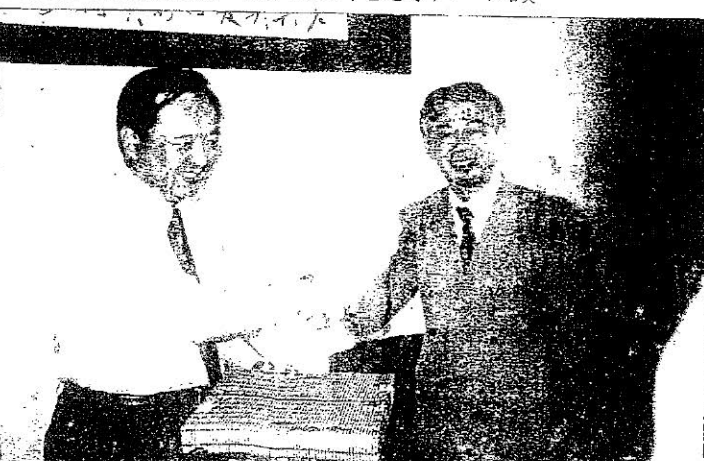
台儿庄是历史圣地,遗憾的是,在台儿庄参战的日本军人中,有我家乡松江63连队的士兵,我作为他们的子孙后代,从心里向中国人民谢罪。”随后,日本客人参观了展馆及台儿庄大战全景画馆,观看了大战实地录像。在纪念馆大厅,小松先生照

“前事不忘后事之师。”

在市领导和台儿庄区领导的陪同下,日本客人乘船游览了台儿庄大运河。其间,双方还就一些合作项目进行了诚恳的磋商。23日晨,日本客人结束了在枣庄的访问。

(记者 田慧 杨军)

因为市长马金忠会见小松昭夫



日本の協力呼びかけ

中国 秦荘市投資経済交流説明会 松江



中国山東省の秦荘(ジン)で開かれ、山陰両県から「アオチュアン」市による企業代表ら約百人が参加した。秦荘市の進める投資経済交流説明会が十二日、松江市内のホテルプロジェクトが紹介され、日中両国の経済交流や友好親善を誓い合った。

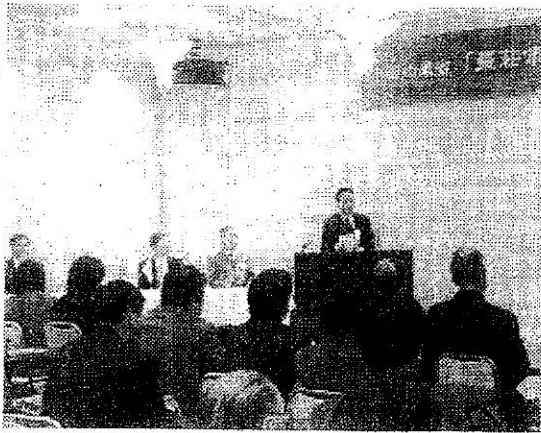
山東省南部に位置する秦荘市は人口三百六十五万人で、石炭など豊富な地下資源を利用した化学工業や農業が盛ん。国共合作軍と日本軍松江八三連隊の激戦地でもある。今回の説明会は大坂、東京で開かれる同省投資貿易説明会に合わせて、同市など文化経済交流を進める「小松電機産業(本社・松江市乃木橋町・小松昭夫社長)」と「人間・自然・科学研究所(同)」が企画した。

秦荘市からは馬金忠市長ら十七人が出席。馬市長は「両国は友好三十周年を迎える。日本の技術を取り入れ、秦荘市への理解を深めてほしい、双方の発展を促進したい」とあいさつ。炭鉱開発や、特産品であるザクロを使ったワイン、ドリンクの生産など、同市が力を入れている対外協力プロジェクトを説明し、協力を呼びかけた。また日中国交正常化三十周年を記念し、同研究所が中心となって同市に環境、健康、平和をキーワードにした観光施設を設立すること

で合意した。同省投資貿易説明会は十四日、大阪マーチャンダイズ・マート(大坂市中央区)で開かれる。

中国・秦荘市への投資説明会開催

松江会場に30人参加 地域文化経済で日中交流進める



日中国交正常化三十周年を契機に、地域文化経済を通じた両国間の交流促進を目指す中国・山東省秦荘市への企業誘致についての説明会(主催・秦荘市)がこのほど、松江市内のホテルで開かれた。県内企業を中心に約八十人が参加。秦荘市での投資環境について説明を受けた。

埋蔵量を誇る石灰石をはじめ、花こう岩、石英、石灰石などの資源を有し、同省の石灰化学工業の中核都市として発展する。説明会は、大坂での同省の投資誘致・貿易懇談会にあわせて、同市と交流を進めていた小松電機産業(松江市乃木橋町)が窓口となり開催が決定した。同市は人民政府経済貿易交流団(団長・馬金忠市長)を編成し、来松高級シース生地生産や炭鉱建設など同市が進め

中国・秦荘市に観光施設

人民政府と建設で覚書

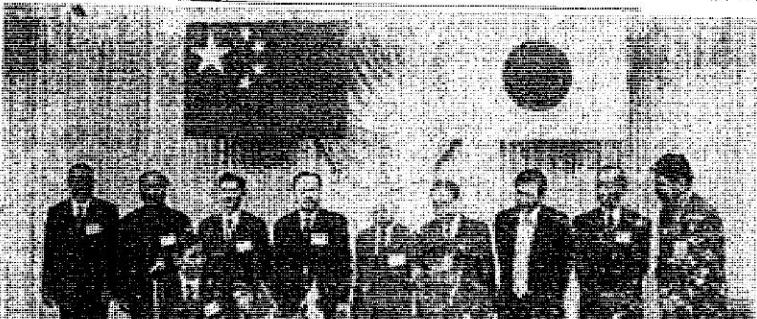
松江・HNS研究所

覚書に調印する小松昭夫HNS研究所代表ら。松江市内のホテルで

覚書に調印した。施設は、同市の観光公園「秦荘市植物園風光旅游区」の敷地内に建設を予定。日本国政府で参加企業を呼び、同研究所と同名の会社を創設し、同市特産品の石綿(セメント)、炭(なつめ)、石灰石などを活用した観光資源の開発を目指す。

松江市内のホテルで行われた調印式には、秦荘市の馬金忠市長と小松昭夫同研究所代表らが出席。調印後、馬市長は「日中は一つ国でただけの隣邦。経済が発達し近代化が進む日本と新緑が豊潤な中国には補完性がある。より協力関係を強固にするため、基礎を固めていくことが大事。協力パートナーとして、観光、観光に力を入れてほしい」とあいさつした。

小松代表は「同業の構想について、健康、平和、環境をテーマとして、経済にリンクさせる」と説明。二十一世紀に向ける第一歩が今日から、



小松電機産業(松江市乃木橋町)の研究機関「人間・自然・科学(HNS)研究所」はこのほど、中国・山東省秦荘市自民政府と秦荘市に観光施設を建設することで合

中国棗莊市との
文化交流推進へ

松江の民間研究所

松江市の小松電気産業が運営する「人間・自然・科学研究所」はこのほど、中国山東省枣庄市と文化交流を進める合意書に調印した。

同研究所が主要な研究テーマとしてゐる儒学の開祖・孔子が山東省の生まれであることなどから、数年前から小松昭夫同研究所代表が知人を通じて秦荘市民と知り合い交流を深めていた。

同市は山東省の南の玄関口で、人口約三百万人。落花生などの経済作物の栽培や冶金（やきん）が盛ん。馬金忠市長たち代表団が大阪で経済投資説明会を開くため来日したので機に一行を松江に招待。交流合意書の調印が実現した。

同研究所は調印を機に、孔子、孟子像など四体の銅像製作を同市に依頼。交流のシンボルとしたい考え。この他、恒久平和を願う碑を共同で設置する計画もしている。

台児莊、曲阜で交流会

松江・人間
自然科学研
来月初めに訪中団

この日、中国交正常化三十周年を迎えるのを記して、長年草の根交流を続けてきた松江市の人々を代表する者が訪中団と会談した。日程は九月四日の四泊五日の予定で、関空から上海経由で行く。

今回の訪中のフィナーレに、中国政府要人数十人を含む千人規模の銅像除幕式を行う。

「論語」贈呈式

主国・山東省の世界石櫓（トウマク）祭、台児在大戦記念館、幅敦のメッカ・曲阜を訪ねる「日中地域文化経済交流会」を催す。

大戦記念館を訪れ平和祈

訪中団は小松所長（小松電機産業社長）をはじめ総勢四十五人で、十八日までに申し込めば若干の追加参加も受け付けるという。費用は十二万四

このうち白虎荘は第二次大戦の激戦地で、松江六十三連隊の山陰出兵兵士十人余りが戦死している。求年はその六十五周年の献花をする。

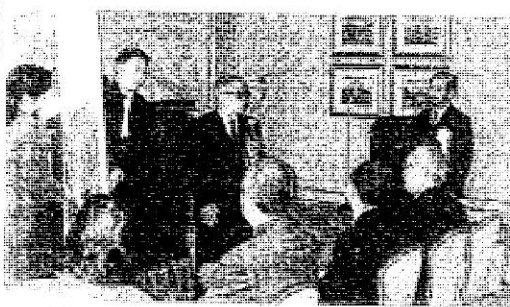
意の献花をする。

千田(国内交通費除く) 同研究所は今春、日中英三カ国語対訳の『論語』を出版したほか、中国、ファクス32・36200 問い合わせ先は電話08 52・32・36636、 人間自然科学研究所

に永久平和記念碑の建立を屢望している。その二環として、秦荘市で高さ約二メートルの孔子、孟子像な

『論語』出版記念式典

東京に研究事務所



張碧清北京中日民間文化交流センター長から山水画を贈られる小松昭夫代表㊤一東京・目白・椿山荘

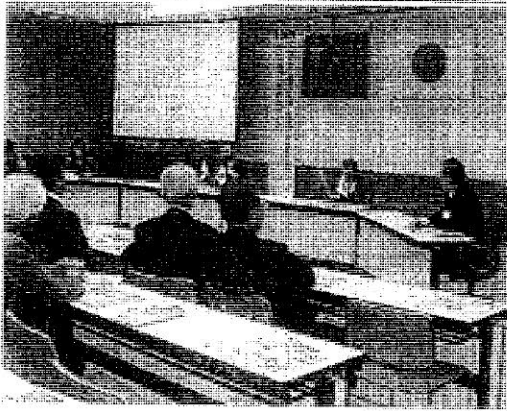
小松電機産業（本社 中日民間文化交流センターの張善清センター）・松江市、小松昭夫社長はこのほど、同社長が日中の世代間交流が社会問題研究などを旨指して設立した「人間・自然科学研究所」の東京事務所開設と、中国孔子基金会などに日中英三カ国語訳の贈った。

『論語』の出版を記念　同研究所は今後、全
 内のホテルで開いた。　国、アジアに活動範囲
 パーティーでは、元　を広げ、研究、出版活
 動などを展開していく
 北京大学教授で、北京　という。

日中正常化30年記念し講演会

松江小松電機
ホールで 東アジアの交流テーマに

日中国交正常化三十周年を記念し、東アジアの交流、経済をテーマにした講演会と座談会(主催・人間・自然・科学研究所)がこのほど、小松電機産業セミナーホール(松江市乃木)で行われた。元北京大教授の張建清北京中日民間文化交流センター長が日中関係を中心に講演。座談会では、張氏を含む四人のパネリストで、アジアの交流について話し合った。



追、感服のある中小企業が必要」とした。また、歴史認識、領土問題のある日中関係について、「交流なければ、理解、紹介し、努力してい

たい」と述べた。座談会では、張氏のほか、東洋技研(韓国)の曹秀煥代表理事、小松昭夫・小松電機産業社長らがパネリストとして参加。若者が歴史を勉強することでもっと近くなる「兄弟」としての交流する中で、経済活動を

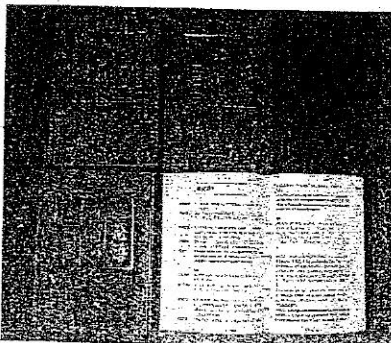
はじめ、うまく展開できると確信するなどの意見が出された。また、小松社長は、三十周年を記念して同研究所から出版された日中英対訳の「論語」を紹介。「和して同ぜず」の言葉を紹介し、交流の大切さを訴えた。

東アジアの交流について話し合う張建清北京中日民間文化交流センター長ら小松電機産業セミナーホールで

山陰経済フォーラム

2002. 2. 19 2002. 2. 19

小松電機産業のHNS研究所 論語を記念出版



HNS人間・自然・科学研究所が出版した「新版 論語」

東京事務所を開設

小松電機産業(松江)乃木福富町、小松昭夫社長)のHNS人間・自然・科学研究所(代表・小松社長、0852・32・3636)はこのほど、東京都港区のビルに東京事務所を開設。日中英三方国語対訳の「新版 論語」を記念出版した。

同研究所は「世界恒久平和を生み出す新たな文化の創造」を目指し、郷土の偉人や日中・日韓関係の研究、出版活動を行っている。これまで出雲地方を中心に活動しており、日本国内とアジア圏に活動の輪を広げるため、東京事務所の開設を決めた。

床面積は約百平方メートル。同社の手掛ける上下水道設備遮断制御監視システム「やくも水神」の展示場を兼ねる。スタッフ三人が常駐し、研究所の事業PRや研究、出版活動の情報収集などに当たるほか、研究所の趣旨に賛同する国内外の研究者を客員研究員として招く。

東京事務所の住所は〒105-0001 東京都港区虎ノ門五-1-31、虎ノ門40Mビル9階(03・5403・7518、ファクス同34335・1288)。「新版 論語」は、同研究所のセミナーで昨年講演した孔子の文化大学(中国・山東省曲阜)教授の孔慶(本名・孔祥林)氏が総編集者を務めた。四百三十二頁で原文、日本語読み、日本語訳、現代中国語訳、英語訳を掲載している。原文が「子曰(いわく)」の始まり方に代表される諸篇を語録体(空句)で書かれており、どこからでも読める。非売品で三千部印刷。希望者に配布する。

同研究所では東京事務所開設と論語出版を記念し、三月十日午後二時から小松電機本社で講演会・座談会を開く。元北京大教授の張建清さんが講師を務める。会費二千円。出席者には論語を贈る。申し込み・問い合わせは同研究所。

人間・自然・科学研究所

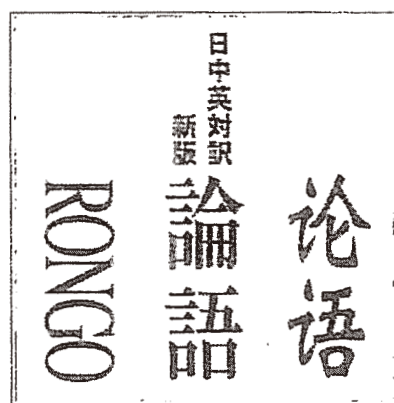
日中英対訳新版「論語」出版

HNS人間・自然・科学研究所
(松江市乃木福富町七三五)

一八八 小松昭夫代表) は、サ

務所を開設し、新たな一歩を踏み出した。

これを記念し、世界恒久平和



HNS人間・自然・科学研究所

ンフランシスコ講和条約締結五十周年、日中国交正常化三十周年、日韓国際交流を迎えた本年、当研究所のあゆみも創立から八年を迎えたことで、これまでの出雲地方を中心とした活動から日本、そしてアジア圏に活動の輪を広げるべく、このたび、東京虎ノ門四十森ビル九階に新事

を生み出す文化の創造をめざして、日中英三ヶ国語訳『論語』を出版した。

広辞苑によると、論語とは四書の一。孔子の言行、孔子と弟子・時人らとの問答、弟子たち同士の問答などを集録した書。となつてゐる。

一九八八年ノーベル賞受賞者

バリ宣言において、人類が二十一世紀に生存していくには二千五百年前を振り返り、孔子から智慧を探す必要がある。また、一九九九年孔子生誕二千五百五十年を記念して北京で開催された、儒学と二十一世紀の人類社会の平和と発展シンポジウム(十七ヵ国参加)では、一孔子の理念と教えが現在の諸問題に智慧を与える一ことが確認された。これを踏まえて、今回の出版となった。

孔子の名言業に「その身正しければ、令せずして行なわる。その身正しからざれば、令すといえども従わず」とある。

要約すると、自分の行ないが正しければ、命令しなくても人はついてくるし、そうでないときは命令してもしたがらない。およそ人の上に立つほどの者はかならず心すべきこと、となつてゐる。

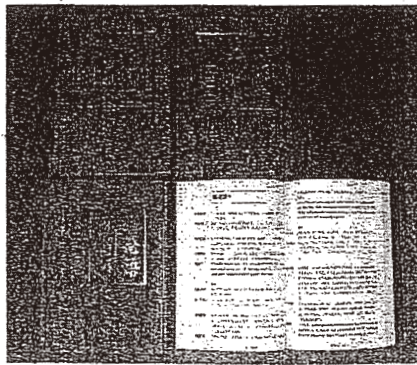
今回出版の三ヶ国語訳の論語は書店にはなく、入手の問合せ先は、人間・自然・科学研究所 電話リ〇八五二一三二一三六二六 担当・須藤まで、

東京事務所を開設

小松電機産業(株)(松江市乃木福富町、小松昭夫社長)のHNS人間・自然・科学研究所(代表・小松社長、☎0852・32・3636)はこのほど、東京都港区のビルに東京事務所を開設。日中英三カ国語対訳の「新版 論語」を記念出版した。

同研究所は「世界恒久平和を生み出す新たな文化の創造」を目指し、郷土の偉人や日中・日韓関係の研究、出版活動を行っている。これまで出雲地方を中心に活動しており、日本国内とアジア圏に活動の輪を広げるため、東京事務所の開設を決めた。

小松電機産業のHNS研究所 論語を記念出版



HNS人間・自然・科学研究所が出版した「新版 論語」

床面積は約百平方メートル。同社の手掛ける上下水道設備速隔制御監視システム「やくも水神」の展示場を兼ねる。スタッフ三人が常駐し、研究所の事業PRや研究、出版活動の情報収集などに当たるほか、研究所の趣旨に賛同する国内外の研究者を客員研究員として招く。

東京事務所の住所は〒105-10001 東京都港区虎ノ門五-1-31、虎ノ門40MTビル9階(☎03・5408・7518、ファクス同3435・1238)

「新版 論語」は、同研究所のセミナーで昨年講演した孔子文化大学(中国・山東省曲阜)

教授の孔健(本名・孔祥林)氏が総編集者を務めた。四百三十二ページで原文、日本語読み、日本語訳、現代中国語訳、英語訳を掲載している。原文が「子曰(いわく)」の始まり方に代表される簡潔な語録体(警句)で書かれており、どこからでも読める。非売品で三千部印刷。希望者に配布する。

同研究所では東京事務所開設と論語出版を記念し、三月十日午後二時から小松電機本社で講演会・座談会を開く。元北京大教授の張鶴清さんが講師を務める。会費二千元。出席者には論語を贈る。申し込み・問い合わせは同研究所。

日独「さくらの女王」の手を握り笑顔の小泉首相一語
相宮邸で4日午前、松田真徳写す



日独桜の女王が
小泉首相を表敬
小泉純一郎首相は4
日、ドイツ・ハンブルク
さきの女王のアンネ
マリーゼ・マーンと
本さんの女王の浅
玲子さんの露敬語を
けた。相は「栗の
今年開花が早くも
つてしました。い
ながら、国女王、
シレーダー、独
クラシック音楽の
プレゼントされた
話を披露した。

連立の維持より“小泉流”大事？

和して同ぜず」首相連発

「君子は和とて同ぜず、小人は同じて和さす」といふ。小泉純一郎首相がこの論語の一節を多用している。4日配信の小泉内閣メルマガジンの「いおんはーと」のコーナーでも引用し「君子は他人とよく心を合はせて事に当たる。政治や行政に対する国民の信頼が揺らいでいる。心を合はせて努力しなければなりません」と決意を新たにさせている。首相がこの一節を引用したのは、2日の新制採用公務員の研修開講式が最初。首相は「一人の意見に付和雷同せず、自分自身で考える人間であってほしい」と激励したが、首相周辺にもっとも「事務局が用意したあいさつ文に首相目の押入したといふ」かなり拍気入りのフーレスとみられ、首相は3日の自民党の青木幹雄参院幹事長らとの会談でも、武部勤聖相の統投を決定するにあたり、「自公保3党がすべての政策で足並みをそろえていくことが重要」といふことを強調して同席した。そして「和して同ぜず」といふこともよくある」と述べた。

官僚に論語のスス

人蘭院がこの書、奨励する課長級対象の公務員研修で、加地伸行・大塚大名義教授（中国語学）を講師に迎へ、古典の中の古典「論語」の研究を行つてくゝになった。疑惑も不祥事の相次ぐ外務省をほげ、義が蘭の言傳に王士の教を聞く耳があるかといふか？

【鈴木琢磨】



加地伸行
名誉教授

英知が凝縮した古典を精
み、考えてもらいたかつ
た（根本康王・公務員研
修所教務部長）

定員は30人。各省庁の課長級約20人、官民交流の観点から民間からも約

それにしても古代から日本の政治家、官僚に影響を与えてきた「論語」

は手厳しい。とりわけ外務官僚に対しては「遠慮の極み」とまで表現する。

大学教授で哲学者の露田
漣一さんの「ソクラテス

はあっても知恵がありま　ちよくないが、微塵よ
せんよ」はみみちいほつがマ

の弁明」の2コースある。
國論語は思索の宝庫

「儒教」学の第一人者で、だという意味です。ぜひある加地さんの言懐批判、たくさんまいの天啓書な

日本の政治家、官僚に影響を与えてきた「論語」

[illegible]

春の研修で採用
「奢れば不遜」訴え



1050001

港區虎門五一三一

虎ノ門40森ビル九階

人間、自然、科学研究所
代表、小松昭夫、兼

内閣総理大臣官邸

〒100 東京都千代田区永田町二丁目3番1号
電話 (03) 3581-0101 (代表)

人間・自然・科学研究所
代表 小松 昭夫 様

このたびは、日中英対訳「論語」をお送り頂き、ありがとうございます。この発刊を通じて、恒久平和を生み出す新たな文化の創造を目指される小松さんのお気持ちを胸に、大いに活用させて頂きます。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。

平成14年3月26日

小 泉 純 一 郎

「島根の魅力広めたい」

中国・青島の
マスコミ代表団 P R 目的に来県

中国山東省青島市のマスコミ代表団が二十五日、青島市を日、県内を訪れた。日中の友好関係を深め、島根の魅力を中国でPRするため、企業訪問や観光などをした。

松重機産社長の代表は「T(情報技術)関連の県内企業を見学し最新技術を学び、堀川遊覧船に乗り玉造温泉など県内の観光地も訪問した。」

島市のテレビ、ラジオ局、新聞社の社長や編集長など六人。小松所長が島根の歴史などを紹介した。その後、一行

同市対外文化交流協会の王永生会長とは「今年には日中国交正常化三十周年に当たり、意義ある訪問になる。島根の素晴らしい自然や企業を、ぜひ中国で広めたい」と話した。

県内企業の作業現場を見学する青島市のマスコミ代表団

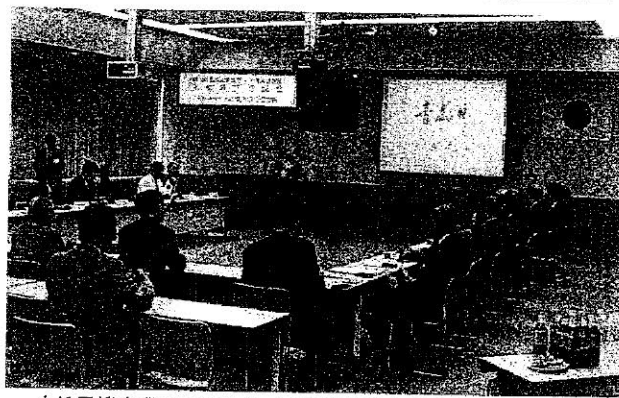


2001. 8. 21

山陰経済ウエブ

青島人民政府(中国)と経済交流

小松電機産業のHNS研究所



小松電機産業で開かれた「中国青島市人民政府・中海六道湖園文化経済交流会」＝松江市乃木福富町

副市長ら6人が視察

小松電機産業(松江市乃木福富町、小松昭夫社長、0852・32・3638)のHNS研究所(同、小松昭夫代表)はこのほど、中国山東省・青島市人民政府の関係者六人を招き、交流を深めた。一行は米子市や境港市、松江市内の企業を訪問、経営の実態を視察した。

同研究所は一九九四年に設立。郷土の職人や日中・日韓関係の研究や出版などの活動を行っている。今年五月には約八十人の訪中団を組織し、中国の西安、曲阜、濟南、北京を訪問。山東省の省都・濟南での交流などが

決まった。

青島市人民政府の一行は六人で、副市長は周副市長。樹ダイマツ(米子市旗ヶ崎)などの企業を視察し、小松電機産業本社で「中国青島市人民政府・中海六道湖園文化経済交流会」に臨んだ。青島市のメンバーをはじめ小松代表、大島鶴(松江市乃木福富町)の古賀隆昭社長ら計約三十人が参加した。

交流会発起人代表の原徳興(松江市西原第一丁目)の後藤信社長が「山東省は日本に近く、海を通じてこれから交流が急増するだろう」とあいさつ。周副市長は「島根、鳥取の企業を訪問し、経済発展するとの強い印象を持った」と話した。

周副市長らは青島市の現況や青島に進出している日本企業、青島港の規模、取扱量を紹介したほか、八月十八日・九月二日まで開かれる「青島国際ビール祭り」、十月に開催される「中国青島国際葡萄酒(ぶどう)酒技術及び設備博覧会」のプレゼンテーションを実施。日本側は小松電機産業の小松光雄専務が同社のヒット商品である「シートシャッター門番」や「やくも水神」の説明を行った。

「郷土の偉人」にスポット

児童文学・小説・漫画の3点



洪水防ぐため岩山くりぬいた周藤弥兵衛

育成に結び付ける。

HNS研究所は、水処理装置など制御機器製造の小松電機産業

書の機会を提供する。

の三点セットで紹介することで、活字離れが言われる子供たちに読

郷土の偉人にスポットー。HNS（人間・自然・科学）研究所（島根県八雲村、小松昭夫社長）

（松江市、小松昭夫代表）は、江戸時代に四十二年かけて岩山を削成、社会貢献を担当している。活

周藤弥兵衛は出雲の国日吉村（現在の八雲村）の下郡（大庄屋）

で、洪水を繰り返す意宇川の流れを変えるため、五十六歳から岩山をくりぬく作業に入り、一七四七

HNS研究所

人材育成の「刺激剤」

小説・児童文学・漫画を出版

り、切り通しを開いた周藤弥兵衛 勳の一環として地域の「人と水」を紹介する小説、児童文学、漫画をテーマにした出版を続ける予定を同時に出版した。郷土のために、全国の自治体などに「郷土の生涯をささげた先人の足跡をたど 偉人」の再発見を働き掛ける。先

ることによって、町おこしや人材 人の活動を小説、児童文学、漫画の三点セットで紹介することで、活字離れが言われる子供たちに読書の機会を提供する。



佐陀川開削に尽力「清原太兵衛」

応募小説
児童文学
マンガ

3冊セット 鹿島町が出版

郷土の偉人
もっと知って **全戸に無料配布**

鹿島町が、同町内の佐陀川開削に身をささげた「清原太兵衛」をテーマに懸賞募集した小説が、このほど出版された。小説に併せて「清原太兵衛」の児童文学とマンガも刊行され、三冊セットで全戸配布。町では「郷土を開拓した偉人の業績を大人から子供まで知ってもらいたい」と話している。

小説は昨年、町合併四十周年記念事業として一般から募集。昨年七月から十二月までに全国各地から九人が応募した。作品を島根女短大の藤岡大拙学長らが審査。最終選考に残った四編の中から、小説としての面白さや歴史的な資料を十分に生かした内容などから、松江市東本町の寺井敏夫さん（ペン名）の「JA島根県共済農業協同組合連合会専務」の作品が選ばれた。

小説はA5判、百九十二ページ。江戸中期、清原太兵衛が水害に悩む松江城下を見て水路の開削を決意。宍道

鹿島町が出版した「清原太兵衛」の小説と児童文学、マンガの3点セット

湖北岸と日本海を結ぶ水路の業績が、だれにでも分かる開削工事に命を掛けたその「りやすく、読みごたえのあ

る表現で描かれている。この小説に併せて町では、将来を担う若い世代にも先人の偉業を知ってもらおうと、マンガ（小室孝太郎作）と児童文学（村尾靖子作、高田敷伸絵）も刊行。三冊セットで町内の全世帯二千四百六十一戸と、学校や公民館などに無料配布した。

小説・治水の偉人
—大槻七兵衛

寺井 敏夫著

義民の遺業克明に描く



本書は、出雲の高瀬川開削など治水・開拓事業に尽くした大槻七兵衛の、親子孫三代にわたる苦闘を描いた伝記小説である。松江藩とのあつれきから親子二代が悲運に終わり、三代目にしてようやく念願を達成、名譽を回復するという壮大な物語である。

通読して、出雲平野の開拓にける七兵衛の志の高さと、わが身の不幸を顧みぬ大槻家三代の献身的な働きぶりを克明に描いた、スケールの大きさに圧倒される。

特に、作品が説得力を持っているのは、作者が「義民の思想」で主人公の七兵衛をとなえているからである。周知のように、義民とは、封建時代に社会の底辺にいる農民や町人のために、わが身と身代をなげうって尽くした人である。大槻家三代の治水事業は、まさしく義民にあえて出雲地方の農民を救うための義民による義挙であった。

主人公が活躍した一六〇〇年代は、戦国時代が終わる、各藩は農本主義のもとで競って新田開発に伴う治水事業を推進した時代であった。松江藩も財政を確立するため、出雲平野の開拓は至上命題であった。

他方、七兵衛は農民を貧困から救済したいとの一念で、治水事業に精励した。これらの治水事業で、出雲平野の米作は一挙に二万石以上の増収になり、斐伊川から運河を通して奥出雲―日本海への物流が可能になったのだから、いかに大事業であったか分かる。

財政の確立を目的とする松江藩と、貧しい農民を救済しようと立ち上がった七兵衛との対立は不可避であった。大槻親子に地所・身分の剥奪（はくたつ）、処刑などの数々の理不尽な災難が降りかかる。

作品は、計算された構成と平明達意の文章、老練な語り口で出色の出来栄になった。

作者は元農協職員で、現在、島根県文学連盟理事として活躍。これまで『清原太兵衛』『隠岐の嵐』を出版して注目されている。ぜひ一読を勧めたい。

(池野誠・島根県文学連盟会長)
(HNS人間・自然・科学研究所・一四〇〇円)

2002年8月25日 山陰中央新報掲載

日刊工業新聞 2002年(平成14年)8月27日



出雲の偉人「大槻七兵衛」

HNS人間・自然・科学研究所(松江市、小松昭夫代表)小松電機産業社長、0852・32・3636)は、開拓と治水に生涯をかけた出雲の偉人「大槻七兵衛」を描いた児童文学(村尾靖子著)、小説(寺井敏夫著)、漫画(寺戸良信著)の3部作(写真)を出版した。

児童文学・小説・漫画の3部作
HNSが出版

夫著)、漫画(寺戸良信著)の3部作(写真)を出版した。いずれも、未来をみえ、時代を超えた人間愛、郷土愛の大切さを訴える。初版は3000部。価格は3冊組セットで4200円(消費税込)。同研究所が発行する「人と水のシリーズ」3作目。

これまでに郷土の治水の偉人として「周藤彌兵衛」、「清原太兵衛」、いずれも3部作を出版している。同シリーズは、HNSが提唱する「心と高い志を通して地域の振興を図る」という「一村一志運動」の一つ。

HNS研究所の「太陽の國 IZUMO」(税込2500円)が、刊行された。地域づくりの手引きとしても、混沌の現代をより豊かに生きるためには何をなすべきかを考える上で、少なからぬヒントを与えてくれるはずだ。

しかもこれは社会評論家や宗教家、あるいは行政が書いた本ではない。地域で、地域とともに、未来を見詰めながら、大宇宙を生きていることを命題としている企業が、ユートピアのモデルとして山陰を舞台に「太陽の國出版」とを付けて、二十一世紀のこの地方の理想的なありようを、具体的に示したものである。

もちろん空想・空論ではない。「今日、世界は環境破壊と地域紛争の多発によって人類破滅か、それとも共通の目的を見いだして的確な役割分担と合意形成の中から、みんなが心豊かに生きて天寿を全うできる地球社会を創造できるかの岐路に立たされている」との現状認識は、多少皮相的だとしても異論をほさぬ人はいないだろう。

そして本文で「太陽の國出版」の目的「人類と人間」「いま

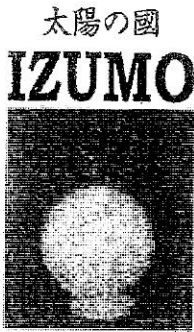
地域づくりの具体的な処方せん提示

地球は「何をなすべきか」と章分けて人類が歩んできた歴史を、関係の新聞雑誌記事なども引用して大観した後、山陰地域の歴史的、地質学的な背景と特質に照らしながら「心の首都(松江市市街地再開発構想)」「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・宍道湖圏域の新構想)」「なごみ地域づくりの具体的な処方せん」を描く。

本書を出版したHNS研究所は、シートリチャーターと下水などの浄化プラントメーカーとして知られる小松電機産業(本社松江市)が、人間・自然・科学という極めて今日的、哲学的テーマを追究するために設立した機関で、本書は主に小松電機社長の小松昭夫氏自身が執筆したものだ。

HNS研究所は「一村一志運動」を提唱、これまでに江戸時代末、独力で島根県八雲村の切り通しを開削し、恒常的だった意平川の氾濫(はんらん)をなくした伝記「須藤弥兵衛」同じく宍道湖の氾濫から松江を救った佐陀川を開削した「酒原太兵衛」などを出版しているほか「中海本庄平広の未来構想シンボ」(緑のすびシンボ)などユニークな公開会議を開催。

今年も十月三十日、松江市のくにびきメッセで環境微生物学の権威・高嶋康毅博士らを招き「千年記念事業太陽の國/IZUMOシンボウム」を開く。



HNS研究所発行

工業新聞

Business & Tech

混沌状況を打破し 国際共生社会を

【松江】小松電機産業社長でHNS(人間・自然・科学)研究所(松江市乃木福富町、0852・32・3636)所長の小松昭夫

さんが、21世紀の地球のあり方を提案する「太陽の國 IZUMO」(A4判、154頁、2500円)を発売した。

著書は現状を混沌の世紀末と指摘し、この状況を打破するため国際共生社会を提唱、そのための具体的な

プランを提示している「心のインフラ整備」「感謝と戦争の歴史記念」「心の首都(松江市市街地再開発構想)」「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・宍道湖圏域の新構想)」「未来を拓く研究教育機関」に4大別、地方に当ってはめて事業提言している。10月に演会も開催する。



長所HNS研究所
小松昭夫氏が発刊した「太陽の國 IZUMO」

文化

現代中国に生きる孔子

＜原田 弘吉＞

この五月、K社主催した取引先グループ約八十人による中国文化交流の旅に合わせ、孔子のふるさと曲阜を訪ねた。孔子は儒学の祖として世界三大聖人の一人。筆者の若いころ旧制中学時代には「國漢・英数」と称して漢文は必須科目であり、杜甫や李白の漢詩、十八史略抄を盛んに勉強したが、儒学はいわゆる東洋精神のエッセンスであった。社会主義中国において、その孔子はどのように受け止められているのか。二千五百年前、かの聖人を生んだ地に日本人が足を踏み入れる機会はめったになく、曲阜には一行の興味、関心が集中した。

曲阜は黄河にほど近い山東省の魯都・済南から専用バスで約二時間。案内役の孔慶祥は、山東大学で日本の上智大学に学んだジャーナリストだが、孔子誕生七十五代の子孫でもある。

現地の孔子文化大学に着いて驚いた。広大な敷地に六つの学院、計三十五の専攻科が設けられ、孔子研究所や山東省儒学研究所も校内にある。教職員十九百人、大学院生と本科生(四年)、専科生(三年)を合わせ二万人以上が在学しているほか、約九千人が通信教育を受けているという。大学本館は白壁の十階建て。文化広場の大孔子像は、新緑に照り輝き天を穿くばかりで、堂々たる威風凛々とした雄姿がめづる。

みた。社には有名な「山行」もある。中国の詩は自然の風景を客観的に叙し、主観を内に秘める俳句の心に通じるものがあるように思う。しばらくして隣席の終業教授から、句に呼応した次のようなメロを渡された。

孔子像
大哉孔子千古聖 仁徳忠恕信和平
弘文育英才光輝 聖子孫敬奉大同
終業教授 辛巳夏 孔子故里
眺み下せば一帯の景は孔子千古の聖 仁徳忠恕信和平を備(う)えう
弘文育英才光輝(しかん)に光る
聖子(かん)く歌歌して大同に歩すとなろうか。

句と詩で敬仰の思い交わす

五月朔(こ)り大学の大孔子像
次いで「江南春」を日本読み会統

「木蘭(もくげい)に解れ、かつて不世出の大儒・双葉山の陽春を阻まれ、われまた木蘭たり得ず」



孔子文化大学にある大孔子像の前で撮影する中国文化交流団の一行

と述べた、という逸話を紹介した。そして「徳の至れるものは勝敗を越え、個人同族や大は國家間で、お互いの協力と熱意で友好関係を築く、平和な世界が実現できる。中日兩國はこれを自覚し、切實な行動(せ)でつたてて進まねばならない」と述べ、宋終業教授もこれに賛意を示した。

懇談の終わりに終業教授から再びメロを頂いた。
遠古修徳友 盛唐主雅情
一衣不卸 何似可憐虫
筆者は「遠く古は徳の友 盛唐王維の情 一衣不卸(し)えに不 断 何ぞ(お)れん虫を憐(あ)われ(む)べし」と訳み下した。王維の詩を詠じた蘭山水を愛する友よ、はるばる日本から送こそ、一衣帯水のきずなは永遠に切れずと終業教授も引用して歓迎の気持ちを込める一方、終業教授は「時間への率直な意見も含まれて

いる。中国は日本文化のルーツであり、中国文化を消化して日本で花開いたものが多々あることを、日本人は忘れてはならない。その意味で筆者にとり、句と漢詩の交流が実現したのは何となくいいことだった。また、孔子文化大学の盛況ぶりや孔子廟に参拝するおびただしい人波を目の当たりにして、孔子が現代中国の人々の中に根付いていることを実感したのである。

大学の講義室や孔子像新緑の巨壁をみれば、孔子の地にありの日本立憲の日(黎明子・俳誌「城」同人、松江市外中原町)

HNS研究所第二回訪中研修団

小松昭夫社長・孔子文化大学客員教授に推される

HNS（人間・自然・科学）

研究所と、同研究所の母体である

で仏法を求め研鑽されたことに感銘。

小松昭夫社長・孔子文化大学客員教授に推される

江市乃木福富町 松江湖南テクノパーク第七号 小松昭夫社長）主催で、中日文化経済交流団中国視察ツアー一行八十名は、五月七日

出雲空港に着陸、訪中研修を有意義なものとして解散した。

中国文化経済交流団中国視察ツアーに当たり、同行した原田トレーディング（松江市嫁島町）の原田弘吉代表取締役会長は、それぞれの視察地の情景を描写した紀行を綴っている。その中から次のように選句してみた。

（俳号瑞明子）

（西安）

長安の城門高し夏燕

桜門の空高く、鋭い声を発して燕が飛び交っていた。

夕焼けて大雁塔の階上る

黄塵の空が淡く夕焼けて、七層の大雁塔の壮麗な姿は、正に西安のシンボルである。

若葉して大師求法の青龍寺

（求法法（ぐほう）。柳の緑、池をめぐる杜若（かきつばた）。日本式庭園に心が和む。弘法大師がはるばる遠い異国の地

（濟南・曲阜）

大黄河ほとりの町や柳絮とふ

（柳絮（りゅうじょ）。黄河に近く泉の多い美しい済南の町、柳の絮（わた）が風にとんできて暖かく我ら一行を迎えてくれた。

済南より専用バスにて曲阜の孔廟、孔府、弘林を訪う。

孔子文化大学にて

鳳凰や弘大教授授けらる

謝々

（北京）

中国人民抗日戦争記念館を訪ね、中国人民に如何に大きな損害と苦痛を与えた戦争であったかを色々な展示の資料を見て知る事ができた。

小松昭夫は歴史書を読み上げ、中日両国はもとより世界人類の恒久平和につながる、強固な友好関係の樹立を訴え、花籠を供え、寄付金を贈呈された。セレモニーのあと、記念館館長を囲んでの懇談会は誠に和やかな語らいのひとときであった。

瀋陽橋の渡り戻りぬ若葉雨

瀋陽橋の現地に、中国人民抗日戦争記念館を視察したあと、北京市街に入る。

アカシアの花咲きめし北京立つ

連日、六時モーニングゴルフにつづく視察のハードスケジュールに、少し疲れて鼻風邪をひいたが、一行八十名、事故もなく、それぞれ楽しい思い出を胸に帰国した。

謝々

（山陰商工スタディ 2001. 7. 17）



（中国人民抗日戦争記念館）にて

小松昭夫社長、孔子文化大学客員教授に推される。

新緑の石畳ふみ孔廟へ

孔子の仁徳は、今も中国人の人たちの崇敬を集め、参詣の人で溢れている。

桐咲くや孟子生まれしところとて

聖廟と金文字で書かれた立派な額の門をくぐり孟廟に参拝する。「孟母三遷の教え」で名高い孟子の母の墓を拝む。空は晴れ、一帯に桐の葉の花が咲いていた。

（北京）

中国人民抗日戦争記念館を訪ね、中国人民に如何に大きな損害と苦痛を与えた戦争であったかを色々な展示の資料を見て知る事ができた。

小松昭夫は歴史書を読み上げ、中日両国はもとより世界人類の恒久平和につながる、強固な友好関係の樹立を訴え、花籠を供え、寄付金を贈呈された。セレモニーのあと、記念館館長を囲んでの懇談会は誠に和やかな語らいのひとときであった。

瀋陽橋の渡り戻りぬ若葉雨

瀋陽橋の現地に、中国人民抗日戦争記念館を視察したあと、北京市街に入る。

アカシアの花咲きめし北京立つ

連日、六時モーニングゴルフにつづく視察のハードスケジュールに、少し疲れて鼻風邪をひいたが、一行八十名、事故もなく、それぞれ楽しい思い出を胸に帰国した。

謝々

（山陰商工スタディ 2001. 7. 17）

HNS（人間・自然・科学）研究所 小松電機産業

「抗日戦争史研究暨和平教育基金会」へ 記念館訪問を契機に百万円を贈呈

HNS（人間・自然・科学）研究所と、小松電機産業（松江市乃木福富町七五〇一八八）松江湖南テクノパーク第七号 小松昭夫社長）主催で、中日文化経済交流団中国視察ツアー（小松昭夫社長）を五月二日から七日の日程をたて行なった。今回は第二回（一回目は昨年九月）で、会社として、中日両国民の対話の輪が広がることを祈念して、今後毎年一回をメドに視察ツアーを継続して行う計画を立てている。

第二回訪中研修団の歴史書を要約すると、ユーラシア大陸の東端に位置する日本列島は、古くより中国、朝鮮半島から、様々な技術や知識、文化を享受し、四季の変化に富む豊かな自然の中で、稲作文化を中心に国家を形成、千六百年以降、三百年に及ぶ世界史上例のない平和な時代を築いた。

十九世紀中頃、アメリカ合衆国の開国要求を契機に、世界的植民地争奪戦に恐怖を受けた日本は、産業革命で生まれた革新的な西洋文明を取り入れ、明治維新を断行した。その後、国内外の劇的な変動のなか貴国を初め多くの国々に歴史的災難を与え、禍根を残し

が必ずしも良好でない状況下、両国の多くの方々の努力により、古くから日本で縁結びの地といわれ、歴史的にも中国大陸と深い繋がりがあった「出雲」から中国南方航空特設便にて、中国人民抗日戦争記念館をはじめ、

古都西安、済南、曲阜孔子故郷首都北京の訪問を実現できたことを心より感謝しますと結び、歴史書に添えて、貴記念館訪問を契機に、「抗日戦争史研究暨和平教育基金会」に百万円を贈呈し、今後とも支援の程、宜しくお願い申し上げますの謝辞を述べた。

第二回訪中研修団 団長 小松昭夫

小松電機産業 下水道展・出展

小松電機産業（松江市乃木福富町七五〇一八八）電話〇八五二一三三二一（三六三六）は、「下水道展01東京」が開催されるに当たって、上下水道計画、制御・監視システム「新水神ネットワークシステム」と、これを構成する「新マンホールポンプ制御盤」、処理施設制御監視装置「新パッケージ水神」を出展発表する（特許申請中）。システム詳細などについては、小松電機産業へ問い合わせをう。



百万円贈呈式、左側小松社長

【寄稿】

雨の蘆溝橋

常議員

原田トレーディング(株)会長

原田弘吉



記念館を前にした視察団一行

昭和12年7月7日、蘆溝橋爆破で口火を切った日中戦争は、小生が旧制中学校2年の時で、兄たちの同僚が、次々召集された事をはっきりと覚えている。

今度HNS(人間・自然・科学)研究所主催の中國大陸を旅する視察団の一員として、去る5月、北京近郊の蘆溝橋のそばにある、中国人民抗日战争記念館を訪れた。規模壮大な本館の六つの展示ホールのほか、一つのハーフ、パノラマ館と二つの四合院の臨時展示室もあり、展示総面積は5千余平方メートルに達する。

この記念館は、日中戦争を記念し、民族の独立のために身を献げた烈士たちを偲び、後世の人々を激励して、中華民族の浩然たる正気を永続させるために建てられたと記してある。館内

の数々の写真や色々な展示の資料を見て、この戦争で中国人民に如何に大きな損害と多大な苦痛を与えたか、日本人として胸痛む思いで見学したのである。

昔、われわれは孔子の論語をひもとき、李白や杜甫の詩を誦し、また中国と日本とは、古くから互いに文化の交流を通じて、深い結び付きの間柄であった。

小松昭夫団長は、記念館館長を前に、趣意書を読みあげ、長い歴史の中で不幸な過去の一時期があったが、「前事不忘 後事之師」一前におこなったことを忘れないのは、後のことをするのによい参考になるの意。一史記の言葉を引用し、歴史に学び現実を直視し、21世紀は、中日両国はもとより世界人類の恒久平和につながるよう、強固な友好関係の樹立を、声を大にして訴え、花籠を供え、一同合掌したのである。

セレモニーのあと、貴賓室で団長から寄付金の贈呈が行われ、終って記念館館長を囲んでの懇談会は、誠に和やかな語らいのひとときであった。席上思わぬハプニングから、小生が安来節をうたう羽目になり、老いらくのノドをふり絞ってうたいあげたのも、一興であったであろうか。

折りしも降り出した小雨の中、一行は傘をさして蘆溝橋を訪ねた。

乾期で涸れた、2百メートル余りの川に架る橋は、石造りで、欄干の柱には石獅子の彫刻のある立派なものであった。

64年前の昔の事が夢のように思われた。

若葉冷えして蘆溝橋雲重く

蘆溝橋渡り戻りぬ若葉雨

黎明子



花籠を供えた視察団一行



安来節を歌い終わって館長と握手する筆者



小松昭夫氏

難民申請をしていた中国人女性が出産し、この母親が失踪し残された女兒への支援活動、また明治以降の日本による中国・朝鮮の侵略をテーマとした劇「再会」のバックアップなどを手掛けるHNS(人間・自然・科学)研究所。この研究所を開設したのが、島根県の電機メーカー、小松電機産業。同社はコンピュータと制御装置・センサーをシステムの組み合わせで、新

企業は人なり

4

研究所開設で社会に貢献 反戦劇と中国人孤児支援

小松電機産業
代表取締役 小松昭夫氏

しいテクノロジーに挑戦する制御システムメーカーだ。もともととは制御装置や配電盤のメーカーだったが、現在では上下水道施設の遠方監視自動制御装置をはじめ幅広い展開をしている。

身内、友人の死を通して、死家の果す役割だ」そう語る小松氏が社会問題、環境問題を同時に解決するモデル事業として立ち上げたのが、HNS(人間・自然・科学)研究所。同研究所が、中国人女性の女兒支援活動、前述の劇「再会」のバックアップをしたのもこういった考えからだ。

代表取締役の小松昭夫氏は、七三年に十萬円の資金と一台の中古車、工具箱一つで、弟と二人で身を起した。途中様々な苦境を乗り越えた小松氏は「人にとって大事なものはV S O P」と述べる。若い時には「V」バイタリティにバラエティ。いろいろなことを一生懸命にやる。そうすると一つくらいものになるものが出てくる。それが「S」スペシャリティ。ところが思うようにはいかない、社会の波にもまれて、自分なりの人生観、「O」オリジナリティが生まれる。そして、時を経て、求められる、これが事業「人の心のインフラ整備が求められる、これが事業

我欲を最大極限まで追求する「企業」、その我欲を抑制し理想的な社会へ誘導する「事業」と、三つの業として考えている。そして企業活動というのは一般的に船に見立てられる。人が集まり、より堅牢で設備の整った船を作り、船団を作って大海原を航海する。事業とは、その海を理想的な状態に作ることなのだ。

「人の心のインフラ整備が求められる、これが事業

でも自分の会社で固執するの、後継者の養成が難しくなる。だから、自分の会社よりも他のことに目が行くと、結果として後継者が育ちやすい環境が生まれるのではないかと(笑)」と朗らかに話す小松氏の目には、自身が理想とする「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会」がくつきりと映っているのだろう。

追蹤報道 小松社長呼籲 李雪梅來本報受捐



小松昭夫社長

進行反思。此外他還向北朝鮮災民捐款了五百萬日元，在自己會社招收新人時，他注意招收中國留學生，力所能及地促進中日友好交流。按小松社長的話說就是想為中國，為中國人做點事。

在採訪時，記者代表本報也代表全體在日華人對小松社長對在日普通中國人及子女的關懷表示了感謝。小松社長也表示，希望通過本報能盡快找到李雪梅。

本報訊(記者 沙飛)本報上曾登出尋找受捐代理人李雪梅的《特殊尋人啟事》為了進一步了解情況，1月11日上午記者在小松電機產業株式會社東京支社採訪了小松昭夫社長。

在採訪中記者進一步得知，小松社長之所以能在島根縣發起為李雪梅女兒捐款的義舉，是有其深刻的思想根源的。小松社長對於日本過去有著清醒的認識，他曾到南京“侵華日軍南京大屠殺紀念館”、蘆溝橋、旅順日俄監獄舊址等地對日本的侵略戰爭

在採訪中記者還發現，小松社長還是位熱愛日中文化交流的有心人，他所領導的(HNSC人間·自然·科學)研究所不但編導出演了反映“殘留孤兒”經歷的反侵略戰爭劇《再會》，而且還親自著書論說日中友好的重要性，所以他身邊聚集了一熱愛日中文化人。因此，記者在採訪中還有幸見到了日本著名的作家早川和宏和漫畫家小室孝太郎，在採訪結束後，大家還暢談與展望了世紀的日中友好關係等。(相關報道請見本報上期第4版)

東庄日報 2002年9月6日



HUA FENG

華風新聞

在日首家娛樂新聞週刊

第89期
2001年10月18日發行

零售二角 定價：每份250元
發行所：東京實業株式會社

http://www.hkfu-web.co.jp
E-mail: hkfufu@hkfufu.co.jp

中華民國100年10月18日發行

5500

24小時均一價格
全國通話135分

日本小松代表團拜會市政府

馬金忠等市領導會見日本客人

本報訊：昨日下午，以日本小松電機株式會社社長小松昭夫為團長的日本小松代表團拜會市政府。市委副書記、市長馬金忠，副市長李學義、吳華盛、崔榮及市政府秘書長楊家道等會見了日本客人，雙方進行了友好地交談。

馬金忠說，你們千里迢迢來參加第三屆中國東北投資貿易洽談會，我謹代表遼寧市人民政府和全市360萬人民，表示熱烈歡迎和衷心感謝！小松社長一直致力於中日兩國的友好事業和領域的合作交流，是中國和遼寧市的老朋友。今年的投資會第三屆，規模比往年大，參會外商人數比往年多，希望在這的新老朋友們借此機會多參觀、多交流，尋求和創造商機，促進雙方合作交流。

馬金忠說，小松先生一行逗留期間，除參加大會開幕式、項目洽談等活動外，還要舉行旨在促進中日友好和文化交流的孔子第4尊銅像啟運揭幕式，向台兒莊大戰紀念館捐贈、獻花等活動，日程比較緊張，希望各位保重身體，生活愉快，祝中日友好和領域的交流合作取得更大成果！

小松昭夫說，我曾多次來遼寧訪問，每次都有新的感受，3年前我以貴客來遼，路上用了8個小時，這次來不僅很順利，而且時間也大大縮短，說明遼寧市及周邊地區有了大的發展，這些成績的取得是與遼寧市領導和全市人民環衛分不開的，這次來遼寧，不僅要參加大會開幕式、項目洽談等活動，還進行文化交流，感謝遼寧市領導為我們提供這樣的機會，我們訪問團成員不僅有政府官員、教育界人士等，還有眾多企業家，希望成為大款的好朋友，共同促進中日友好。

馬金忠和小松昭夫互贈禮物。

據了解，該團9月6日，在東山日 考察後返回日本。

HNS研究所

四体銅像の除幕送出式

小松所長は来年の台児莊大戦

65周年記念行事基金百万円を寄付

小松電機産業(株)(松江市乃木福富町七三五)の著名人が多数出席して、孔子像、孟子像、周蔭彌兵衛像、清原太兵衛像の除幕を行った。孔子・孟子像は、日本一の中国式庭園である鳥取県の燕趙園に奉設される。また、出雲の治水の偉人・周蔭彌兵衛と清原太兵衛の像は、鳥根県内に設置される予定。

台児莊大戦記念館に寄付
来年は、歴史的な「台児莊大戦」から65周年を迎える。交流団は「台児莊大戦記念館」を参観、小松所長が献花するとともに、来年に行われる台児莊大戦65周年記念行事基金として一〇〇万円を寄付した。

こうした活動に対して中国国府からも高い評価を得ている。小松所長の日中交流の促進を、世界恒久平和の実現に繋がるものとして期待されている。

右から孟子像 孔子像 周蔭彌兵衛像 清原太兵衛像

今回の訪問で、HNS研究所と山東省滕州市人民政府は、共同で自然健康法研究センター建設のため調印した。

日中偉人の銅像を

日本に

中国を代表する思想家である孔子と孟子、その思想を受け出雲の治水に多大な貢献をした、周蔭彌兵衛、清原太兵衛。21世紀は水の時代、より多くの人にこれらの偉人のことを知ってもらいたい、という目的で、HNS研究所では、前々回の交流団訪問の際に、中国画報協会を通じて、臺莊市に銅像製作を依頼していた。今回、銅像完成を記念して除幕送出式典が開催された。

九月七日に臺莊市招商局広場で行われた式典には、中国山東政協副主席の王久桂氏も出席した。この外、各界



一行は台児莊大戦記念館(右)を訪れた。大戦記念行事基金百万円寄付(左)



東洋美術が縁

日仏中の文化・経済関係者

燕趙園で交流深める

東洋美術に造詣(けい)が深いフランスと中国の文化、経済団体関係者を招いた懇親会が十七日、東郷町引地の中国庭園・燕趙園で開かれ、両国との交流に取り組む鳥取県内の各団体が、フランス国立ギメ東洋美術館中国美術部長のジャン・ポール・デロシュさん、中国画報協会長の邢雁さん、孔子の七十五代目の子孫にあたるチャイニーズドラゴン新報社主幹の孔建さんらと交流を深めた。デロシュさんは東洋美術の権威として知られ、



県立博物館開館三十周年記念講演会の講師として来日。孔さんら中国側の訪問団一行は、松江市の小松電機産業(小松昭夫

3カ国の友好交流を誓い合うデロシュさん(左から3人目)、孔さん(右端)ら17日、東郷町の依水飯店

.....社長)が来春、燕趙園に孔子と孟子の銅像を寄贈する計画であることから現地視察のため訪れていた。

燕趙園を視察した邢さんは「中国の古い都の特徴が忠実に再現されている。聖人の像が設置されることでもっと素晴らし

くなる」と述べた。参加者たちは園内を回った後、隣接する依水飯店で親ぼくを深めた。

懇親会の席で、デロシュさんは「将来、ギメ東洋美術館所蔵の中国の秘宝を県立博物館で展示したい」と述べ、孔さんは「河北省だけでなく、孔子のふるさとの山東省との交流を深めてほしい」と要望。県日仏友好協会の高多彬臣会長が「これを機に三カ国の交流を深めたい」と締めくくった。

「第四回訪中文化経済交流団」

2002年9月4日～8日

台児荘大戦記念館 献花 大戦65周年記念事業として100万円寄贈



孔子・孟子・周藤彌兵衛・清原太兵衛

四体の銅像除幕送出式



「中国・中海・道湖圏文化経済交流会」

2002年11月16日

於 小松電機産業セミナーホール



日・中・仏 交流会

2002年11月17日

於 燕趙園





倉吉整備局

孔子と孟子の銅像建設

台座など
近く工事

中国庭園近くに

県倉吉地方県土整備局は、東郷湖羽合臨海公園広域公園の東伯郡東郷町引地地内に中国の思想家、孔子と孟子の銅像を建設する計画で準備を進めているが、これに関連して基礎工事・台座工事を12日に入札する。県土木格付C級業者の10社指名で、工期は115日間。

場所は、中国庭園の西側にある集粹館の石張りの中庭。集粹館から中庭へ出たすぐの所に、孔子像と孟子像の2体を並べて建設する。基礎碎石の上の均しコンクリートは2.5角。台座は1・10.5角、高さ約1.5尺。像は高さ約2・3尺、幅0・85尺。転倒防止のため銅像内側に足元固定用の中子(高さ35寸)を入れる。整備完了後は、県内有数の観光地である中国庭園(周辺)に、雰囲気をも

盛り上げる名所が増える
ことになる。

山陰 中 央 新 報

(平成15年) 7月31日(木曜日)

孔子と孟子の銅像設置

東郷・燕趙園 松江の会社社長寄贈

鳥取県



燕趙國に設置する孔子像⑤と孟子像⑥

鳥取県は、同県東郷町に中国を代表する思想設置する。松江市の会社、孔子と孟子の銅像を社長から奇贈を受け、近引地の中国庭園・燕趙園家、孔子と孟子の銅像を社長から奇贈を受け、近孔子と孟子の二番映える

く台座工事に着工して十
月上旬の完成を目指す。
同園では、「中国の雲南
気候十分に堪能してもう
ない」と喜んでいる。

場所として、羽の矢を立て、多目的広場・内を結ぶ中庭を背にして二・三階、五階で、西方向〇・八五階、約を掛けて二辺二高さ〇・八の設し、像を安置、小松社長は、は環日本海交流れており、豊たに書かれています。

小松社長は、
は環日本海交流
れており、豊
いてきつとよ
た」と書くだ

燕趙園二十景

龍
フットボール・展示ホール)
中国来品の展示・中国園
の展示をしています。

マルチシアター
燕趙園が運ばれた経緯や本場
中国の庭園などをビデオで紹
介しています。

天池山
石山の頂に小さな池があるこ
とから名付けられました。石は
河北省・燕山脈の産。

飛雲瀑
飛んでいる雲のように流れ
注ぐ滝です。

一景亭
燕趙園の最も高い位置にあり
全園の景色が一望できます。

荷池
四面荷風樹から眺める荷池は
みごと。見頃は7月中旬～8月
中旬。

七星橋
高く伸びるアーチ型の橋は、七
彩の虹を現しています。

迎水坊
皇帝が船遊びをする時の船着
場をイメージして作られた皇
帝を迎える門です。

集賢館

管理事務所

銅像位置

チャイナドレスで
撮影して頂きたい。
チャイナドレスレンタル
燕趙園管理事務所に
お申し込みください。
大人 500円 子供 300円

金山湖橋
(御野飛江バーナード)

鳥船子まで船型の方は、
ご入場の際、要付(船型門心橋)
に必ず申し出ください。

燕趙門と影壁
燕趙園の主要な出入口。皇帝
色の琉璃瓦を葺き、堂々たる
たたずまいを見せています。

華夏堂
燕趙園の中心となる大軒で、燕趙も
の動物の池、皇帝のシンボルである
金の龍が多数描かれています。

四面荷風樹
「荷」は日本語で「蓮」のこ
と。蓮の葉に囲まれて、花は、
まるで水面で漂っているよう
な趣を感じさせます。

三景軒
石の彫掛けに磨くと、窓から、
荷風樹・華夏堂・一景亭の三つ
の景色が望めます。

らくちん1階コーナー
鳥船子をご利用の場合

東庄日報

2002年9月6日



日本小松代表團拜會市政府

馬金忠等市領導會見日本客人

本報訊：昨日下午，以日本小松電機株式會社社長小松昭央為團長的日本小松代表團拜會市政府。市委副書記、市長馬金忠，副市長李守義、吳承盛、崔榮茂、市政協秘書長楊家強等會見了日本客人，雙方進行了友好的交談。

馬金忠說，你們千里迢迢趕來參加第三屆中國與東北投資貿易洽談會，我謹代表遼寧省政府和營口市380萬人民，表示熱烈歡迎和衷心感謝！小松社長一直致力於中日兩國的友好事業和各領域的全面交流，是中國和營口市的老朋友。今年的投洽會是第三屆，規模比往年大，參會外國人數比往年多，希望在這的新老朋友們借此機會多參觀、多交流，尋求和創造商機，促進雙方合作交流。

馬金忠說，小松先生一行逗留期間，除參加大會開幕式、項目洽談等活動外，還要舉行旨在促進中日友好和文化交流的孔子廟4尊銅像揭幕儀式，向台兒莊大戰紀念館捐贈，獻花等活動，日程比較緊張，希望各位保重身體，生活愉快，祝中日友好和各領域的交流合作取得更大成果！

小松昭央說，我曾多次來營莊訪問，每次都有新的感受。3年前我以營莊來賓，路上用了8個小時，這次來不僅很順利，而且時間也大大縮短，說明營莊市及周邊地區有了大的發展，這些成績的取得是與黨領導和全市人民艱苦奮鬥、努力工作的分不開的。這次來營莊，不僅要參加大會開幕式、項目洽談等活動，還要進行文化交流，感謝營莊市領導為我們提供這樣的機會，我們訪問團成員不僅有政府官員、教育界人士等，還有眾多企業家，希望成為大友的好朋友，共同促進日中友好。

馬金忠和小松昭央互贈禮物。

范了報，敬請9月8日，在威海市...

倉吉整備局

孔子と孟子の銅像建設

台座など
近く工事 中国庭園近くに

県倉吉地方県土整備局は、東郷湖羽合臨海公園広域公園の東伯郡東郷町引地地内に中国の思想家、孔子と孟子の銅像を建設する計画で準備を進めているが、これに関連して基礎工事・台座工事を12日に入札する。県土木格付けC級業者の10社指名で、工期は115日間。

場所は、中国庭園の西側にある集粹館の石張りの中庭。集粹館から中庭へ出たすぐの所に、孔子像と孟子像の2体を並べて建設する。基礎碎石の上の均しコンクリートは2.5坪。台座は1・10坪

盛り上げる名所が増えることになる。

新町構想を検討
フォーラム開く

東伯西部合併協

東伯郡東伯町と赤碕町の東伯西部合併協議会は、新町のまちづくり構想、計画策定に伴い、住民の意見を取り入れるため、とうはく・あかさき新町まちづくりフォーラムを東伯町のまなびタウンと

両町から住民約300人が参加。まず、多目的ホールに全員が集まり、合併協議会の設立から平成16年9月1日の正式合併までのスケジュール、これまでの取組状況などを聞いた。

新町のまちづくり構想は、合併後おおむね10年間を目途にしたもので、まちづくり検討委員会が5分野に分かれてまとめた構想案をそれぞれの委員長が基調提起。そのあ

と5分科会に分かれて、構想案について意見、提言した。

分科会は、①未来をひらく産業のまち（産業）②自然と共に生きる環境のまち（都市計画・環境）③健やかで思いやりのあるまち（福祉・人権）④誇り高く心豊かな人を育てるまち（教育・文化）⑤住民が参画してつくる活

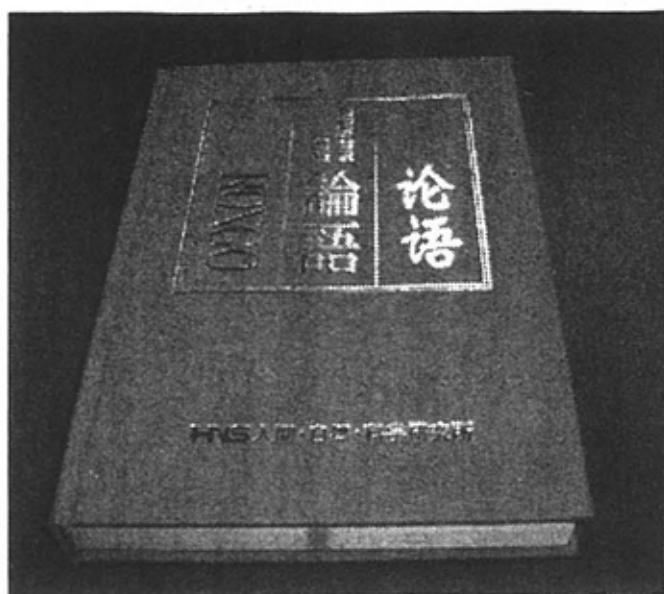


力のあるまち（住民参画）。研修室（東）で行われた第2分科会（自然と共に生きる環境のまち）には、約30人が参加。東伯・中山道路のアク

日中英対訳「論語」を出版

日中国交正常化30周年記念

人間・自然・科学研究 日中国交正常化30周年を
所(HNS研究所・代 記念し、日中英対訳「論
表||小松昭夫・小松電機 語」||写真||を出版した。
産業社長)はこのたび、 同書は原文と日本語読



み、日本語訳、
現代中国語
訳、英語訳で
構成されてい
る。総編集者
は山東省曲阜
市・孔子文化
大学教授であ
り本紙編集主
幹の孔健が務
めた。

8日には、フォーシー
ズホテル椿山荘(東
京都文京区)で出版記念
とHNS研究所東京事務
所開設記念を兼ねた講演
会と披露パーティーを開
催する。元北京大学教授
で北京中日民間文化交流
センター主任・張碧清氏

の講演などのほか、HNS
研究所が提案している
「平和記念碑」建設事業
への呼び掛けを行う。

同研究所では今回出版
した「論語」を日本政府
へ100冊、中国・孔子
基金会へ200冊寄贈、
同会で贈呈式を行う。

同書は希望者に5冊セ
ット1万円で配布され
る。

「論語」、出版記念パ
ーティーについての問い
合わせはHNS研究所東
京事務所TEL||03・5
408・7518(担
当・岩成)まで。

『論語』出版記念し式典

松江の
小松電機 東京に研究事務所



張碧清北京中日民間文化交流センター長から山水画を贈られる小松昭夫代表㊤一東京・目白、椿山荘

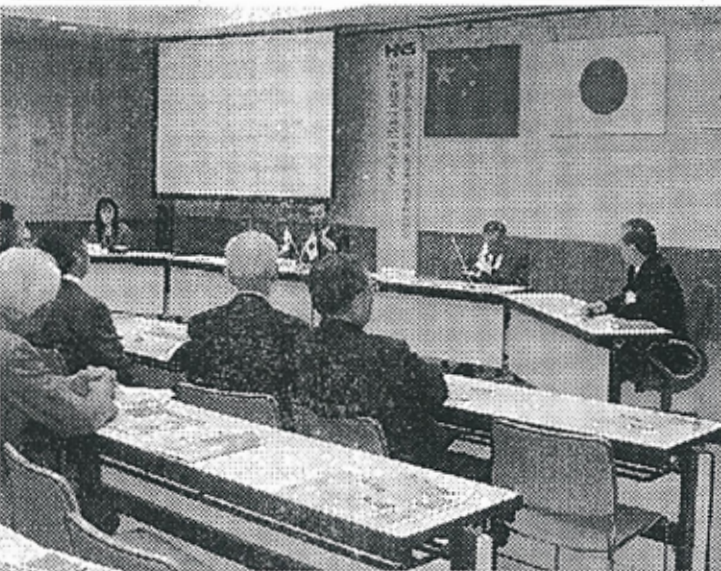
小松電機産業(本社 中日民間文化交流センター・松江市、小松昭夫社長)はこのほど、同社長が日中の世代間交流が社会問題研究などを必要について記念目指して設立した「人間・自然・科学研究所」が『論語』計三百冊をの東京事務所開設と、中国孔子基金会などに日中英三カ国語訳の『論語』の出版を記念したパーティーを、都内のホテルで開いた。パーティーでは、元北京大学教授で、北京という。

日中正常化30年記念し講演会

松江小松電機
ホールで

東アジアの交流テーマに

日中国交正常化三十周年を記念し、東アジアの交流、経済をテーマにした講演会と座談会(主催・人間・自然・科学研究所)がこのほど、小松電機産業セミナーホール(松江市乃木)で行われた。元北京大教授の張碧清北京中日民間文化交流センター長が日中関係を中心に講演。座談会では、張氏を含む四人のパネリストで、アジアの交流について話し合った。



迫、威厳のある中小企業が必要」とした。また、歴史認識、領土問題のある日中関係について、

「交流なければ、理解、信頼、平和、安全もない。交流が一番大切」と指摘。「日本各地との交流について、機会あったら紹介し、努力していきたい」と述べた。

身近な話題
提供下さい

島根日日新聞社
☎23・6760

たい」と述べた。

座談会は、張氏のほか、東宇技研(韓国)の曹秀煥代表理事、小松昭夫・小松電機産業社長らがパネリストとして参加。「若者が歴史を勉強することでもっと近くなる」「兄弟としての交流すること、経済活動をはじめ、うまく展開できると確信する」などの意見が出された。また、小松社長は、三十周年を記念して同研究所から出版された日中英対訳の『論語』を紹介。「和して同ぜず」の言葉を紹介し、交流の大切さを訴えた。

東アジアの交流について話し合う張碧清北京中日民間文化交流センター長らに松江乃木の小松電機産業セミナーホールで

2002年(平成14年)5月13日 月曜日

日本の協力呼びかけ

中国 棗荘市投資経済交流説明会

松江



中国山東省の棗荘(ツアオチュアン)市による投資経済交流説明会が十二日、松江市内のホテルで開かれ、山陰両県から企業の代表ら約百人が参加した。棗荘市の進めるプロジェクトが紹介され、日中両国の経済交流や友好親善を誓い合った。

山東省南部に位置する棗荘市は人口三百六十五万人で、石炭など豊富な地下資源を利用した化学工業や農業が盛ん。国共合作軍と日本軍松江六三連隊の激戦地でもある。今回の説明会は大坂、東京で開かれる同省投資貿易説明会に合わせて、同市などと文化経済交流を進める「小松電気産業」(本社・松江市乃木福富町、小松昭夫社長)と「人間・自然・科学研究所」(同)が企画した。

棗荘市からは馬金忠市長ら十七人が出席。馬市長は「両国は友好三十周年を迎える。日本の技術を取り入れ、棗荘市への理解を深めてもらい、双方の発展を促進したい」とあいさつ。炭鉱開発や、特産品であるザクロを使ったワイン、ドリンクの生産など、同市が力を入れている対外協力プロジェクトを説明し、協力を呼びかけた。また日中国交正常化三十周年を記念し、同研究所が中心となって同市に環境、健康、平和をキーワードにした観光施設を設立すること

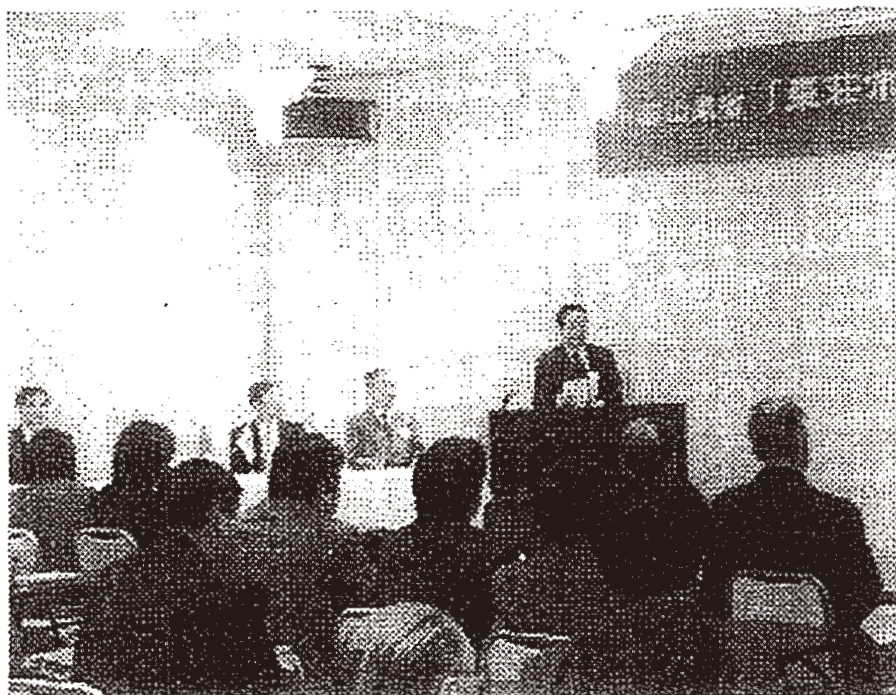
で合意した。

同省投資貿易説明会は十四日、大阪マーチャンダイズ・マート(大阪市中央区)で開かれる。

中国・棗荘市への投資説明会開催

松江会場に
80人参加

地域文化経済で日中交流進める



日中国交正常化三十周年を契機に、地域文化経済を通じた両国間の交流促進を目指し、中国・山東省棗荘市への企業誘致についての説明会(主催・棗荘市)がこのほど、松江市内のホテルで開かれた。県内企業を中心に約八十人が参加。棗荘市での投資環境について説明を受けた。

棗荘市は中国の一大食糧生産地である同省南部に位置し、近隣の滕州市と合わせた人口は約七百二十万人。六十四億リ

坪蔵量を誇る石炭をはじめ、花こう岩、石英、石灰石などの資源を有し、同省の石炭化学工業の中核都市として発展する。

説明会は、大阪での同省の投資誘致・貿易懇談会にあわせて、同市と交流を進めていた小松電機産業(松江市乃木福島町)が窓口となり開催が決定した。同市は人民政府経済貿易交流団(団長・馬金忠市長)を編成し来松。

高級ジーンズ生地生産や炭鉱建設など同市が進め

る三十のプロジェクトと、資金面などの支援を紹介した。

冒頭、馬市長は、「日本の経済発展を学び、日中間で広く友人を作り、貿易交流など促進するのが、訪問の目的」とあいさつ。日本企業のプロジェクト参加を求めた。

小松昭夫小松電機産業社長は「交流が実を結んだことをうれしく思っている。これを機会に新しい文化、経済の交流をしていく」と話していた。

中国棗荘市との
文化交流推進へ

松江の民間研究所

松江市の小松電気産業が運営する「人間・自然・科学研究所」はこのほど、中国山東省棗荘市と文化交流を進める合意書に調印した。

同研究所が主要な研究テーマとしている儒学の開祖・孔子が山東省の生まれであることから、数年前から小松昭夫同研究所代表が知人を通じて棗荘市民と知り合い交流を深めていた。

同市は山東省の南の玄関口で、人口約三百万人。落花生などの経済作物の栽培や冶金(やきん)が盛ん。馬金忠市長たち代表団が大阪で経済投資説明会を開くため来日したのを機に一行を松江に招待。交流合意書の調印が実現した。

同研究所は調印を機に、孔子、孟子像など四体の銅像製作を同市に依頼。交流のシンボルとして考え、恒久平和を願う碑を共同で設置することなどを計画している。

松江・HNS研究所

中国・棗荘市に観光施設

人民政府と建設で覚書

覚書に調印する小松昭夫
HNS研究所代表らと松
江市内のホテルで

意し、覚書に調印した。

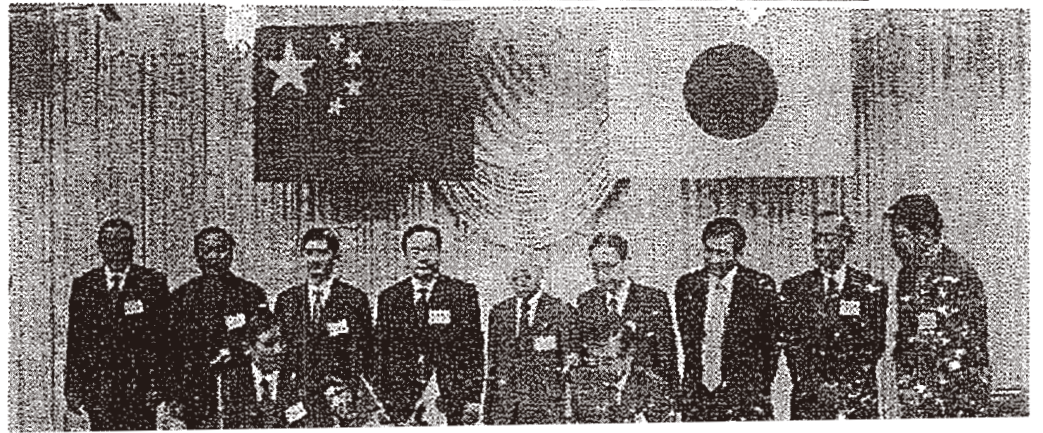
施設は、同市の観光公園「棗荘石榴園風景旅游区」の敷地内に建設を予定。日本国内で参加企業を募り、同研究所と同名の会社を創設し、同市特産品の石榴(きゅうり)、栗(なつめ)、石灰石などを利用した観光資源の開発に着手する。

松江市内のホテルで行われた調印式には、棗荘市の馬金忠市長と小松昭夫同研究所代表らが出席。調印後、馬市長は「日中は海一つ隔てただけの隣邦。経済が発展し近代化が進む日本と資源が豊富な中国には補完性がある。より協力関係を強固にするため、基礎を固めていくことが大事。協力パートナーとして、視察、観光に来てほしい」とあいさつした。

小松電機産業(松江市乃木橋富町)の研究機関「人間・自然・科学(HNS)研究所」はこのほど、中国・山東省棗荘市自民政府と棗荘市に観光施設を建設することで合

小松代表は、同事業の構想について「健康、平和、環境をITを使って経済にリンクさせる」と説明。「二十一世紀、出

雲から世界の恒久平和に
向けての第一歩が今日か
ら始まった、



朝鮮半島と日本列島の使命

人類史上、未曾有の大変動

2010年は^{かのえとら}庚寅です。中国古典「周易」は大人虎変、君子豹変、更新刷新を意味する年とっています。寅年は歴史を振り返ってみても、大きな社会変動のあった年として知られています。

60年前の庚寅には朝鮮戦争が勃発、アメリカ合衆国など16カ国と大韓民国が、朝鮮民主主義人民共和国とソビエト社会主義共和国連邦、そして新しい国家体制が成立間もない中華人民共和国義勇軍と戦い、軍人123万2000人、民間人500万人の死傷者の上に、東西冷戦構造が生まれました。1991年にソビエト連邦が崩壊、東西ドイツは統一されましたが、朝鮮半島では核の脅威が現実化し、今日に至っています。

1991年にニュービジネス大賞を受賞した縁から、国際経営者協会の新春セミナーで「日本はプラザ合意後の国政の判断ミスから、どんなリーダーが出てきても日本一国で国家を維持することは難しくなった。あとはアジアのなかにノア方舟



ニュービジネス大賞受賞（1991年10月）

をつくる以外にない」と講演しました。今回の社会変動はよく100年に一度といわれますが、核拡散の時代に、人と物と情報が世界をめぐり、一国のみで生きられる国はどこにもないグローバル化した状況の中で世界同時経済危機を迎えていることを考えれば、人類の歴史始まって以来の大変化になると考えるほうが、妥当ではないでしょうか。

世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰る

第2次大戦において核兵器が開発され、広島、長崎への投下、敗戦、朝鮮戦争、東西冷戦とその終結を経て、今は核拡散の脅威に直面しています。アルバート・アインシュタイン博士は米ソの水爆実験と第五福竜丸の被災を受けて、1955年に哲学者バートランド・ラッセルとともに「問題は戦争によって解決されてはならない」という思想で貫かれた、「ラッセル・アインシュタイン宣言」を発表しました。

本年、韓国併合より100年を迎えました。併合から12年を経た1922年、来日する船の中でノーベル賞受賞の知らせを受けたアインシュタイン博士は「世界は進むだけ進んで、その間、幾度も闘争は繰り返され、最後に戦いに疲れるときが来るだろう。そのとき、人類は必ず真の平和を求めて、世界的な盟主を挙げなければならないときがくるに違いない。(中略)世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。われわれは神に感謝する。われわれ人類に日本という国を作っておいてくれたことを」という言

葉を残しています。

しかし、著名なジャーナリストであった小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は日清戦争後の1895年に書いた「戦後」と題するエッセイで、こうも指摘しています。

「戦争は終わった。未来には、まだ幾分の暗雲が低迷しているけれども、約束されているものはずいぶん大きなものがあるようである。もちろん、この上さらに雄志を伸ばして、国家永生の偉業を成し遂げるためには、そこに幾多の暗澹たる障碍が横たわっていようけれども、しかし、日本はそれに対して、なんら恐れも抱いていない。おそらく、日本の将来の危機は、実にこの途方もない、大きな自負心にあるともいえるだろう。」（『東の国から・心』平井呈一訳、恒文社発行）。

その後、日本は、日露戦争（1904）に突き進み、韓国併合（1910）、満州事変（1931）・盧溝橋事件（1937）を経て日中戦争が泥沼化し、第2次世界大戦（1939）の勃発を機に日独伊三国同盟（1940）の締結を経て太平洋戦争（1941）に突入するに至りました。敗戦後、東西の冷戦下で朝鮮特需を契機とする高度経済成長時代には一時的には大成功したかに見えた時期もありましたが、今日では、先行きのまったく見えない状況に陥っています。日本の美を追い求める八雲の目は、100年以上前にその行く末をしっかりと見通していたといえるでしょう。

太陽の國 I Z U M O

人間自然科学研究所は10年前に『太陽の國 I Z U M O』という本を出版しました。古代民主主義の発祥地ギリシアでは、火は太陽から灯しました。

島根県出雲市大社町にある出雲大社の宮司が代替わりする際は、宮司となる神官が私のふるさとの島根県松江市八雲町にある熊野大社に参詣し、境内の特別な空間で、木と人の気の昇華により生まれた



太陽の國 IZUMO
(1999年7月発行)

火を持ち帰る「火継ぎ神事」の行事があり、次の代替わりまで一生絶やすことなく継いで行きます。また、出雲大社が一年の五穀豊穡を感謝する新嘗祭を行う際に必要な、古式のままの火起こしの道具を熊野大社から借り受ける神事「鑽火祭」があり、亀太夫神事とも言われています。

人類は他の動物と違い、火を取りこみ、制御、進化させることで文明をつくってきました。

火は硝石の発見によって火薬になり、ニトログリセリンと雷管の発明によって19世紀にダイナマイトがつくられ、戦争に多用されました。これにより大富豪となった発明者アルフレッド・ノーベルの遺言が、ノーベル賞の原資になっています。

20世紀初頭の1903年に航空機が発明され、第1次世界大戦

(1914－1918) に投入されました。その後の急速な発達、重量物の長距離航空輸送を可能にし、さらなる科学技術の進歩は1938年の原子核分裂反応の実証から「究極の火」といえる核兵器を生み出し、第2次世界大戦では航空機によって広島、長崎へ人類初の原子爆弾が投下され、大被害を与えました。

その被害が世界に広く知られたことにより、核兵器はその後一度も戦争では使われませんでした。東西冷戦が約50年続き、ソ連は崩壊し、貨幣のルーブルは紙切れになりました。それが1991年ですから19年前です。世界同時経済危機のなか、先進国中で最も財務体質が悪い国が日本です。そのような状況下、2010年度の予算編成では前例のない44兆3000億円の国債発行を閣議決定しました。このことは少子高齢化が急速に進む現状にあって、不吉な未来を暗示しているように思われます。

東アジアの現状

1998年、韓国の金大中大統領の提案を受け、ASEAN＋3首脳会議の諮問機関として発足した東アジア・ビジョングループ(EAVG)は、自由貿易地域形成などを主とする「平和・繁栄・進歩の東アジア共同体」ビジョンを2001年秋に発表しました。しかしアメリカの21世紀安全保障委員会は、1991年10月に発表した報告書で「北東アジアはもっとも大規模戦争が起こり得る地域」、「唯一、主要国がかかわる重要な領土対立が残る地域」と記しています。

1998年10月に、インド・パキスタンの核実験(1998)とアジ

ア通貨危機（1997－1998）を受けて、東京にある国連大学で開かれた「軍縮問題を考えるエコノミストの会」シンポジウムで、王然均韓国中央大学教授は「アジアの経済危機は第2次世界大戦および朝鮮戦争以降最悪の大惨事です。（中略）大規模な軍事支出と兵員数は高コストおよび非効率の要因であり、経済危機の重要な原因でもある」と述べています。

G20の発足、B R I C s の躍進と多極化が進み、朝鮮の核保有宣言によって東アジアにおける核拡散が現実となり、アジアを軸にした世界的な緊張はさらに増しているといえます。

自然状態は、むしろ戦争状態である

18世紀のドイツの哲学者イマニュエル・カントは『永遠平和のために』（宇都宮芳明訳・岩波文庫）の中で、こう述べています。「一緒に生活する人間の間での平和状態は、なんら自然状態ではない。自然状態は、むしろ戦争状態である。言い換えれば、たとえ敵対行為が常に生じている状態ではないにしても、敵対行為によって絶えず脅かされている状態である。それゆえ、平和状態は、創設されなければならない。」

およそ200年前のカントの、平和は意志的に創出されなければな



なぜ出雲から世界平和か（2008年3月）

らないというこの言葉は、今を生きる私たちの胸に強く響いてきます。

世界で唯一、学内に平和ミュージアムを創った安斎育郎立命館大学教授（国際平和ミュージアム名誉館長）は、2008年3月に当研究所が開いた座談会でこう述べています。

「現代平和学における平和の概念は、戦争の対置概念ではなく暴力の対置概念と広く理解されてきております。人間の能力が100％花開くのを阻んでいる原因、これをすべて平和学では暴力と言います。平和とは暴力のない状態であり、その暴力には三つの類型があって、戦争のような直接的暴力のほかに、社会の構造に根ざした構造的暴力、そしてそれらの暴力を助長したり正当化する文化的暴力、この三つを無くしていく方向こそが、いま、目指されています。」

日本国内の自殺者は警察庁統計によると1998年より10年連続で年間3万人を超えており、これに自殺と断定できないまでも強いストレスなどを背景に死因不明なままで死を迎えた方々などを鑑みると、毎年一都市の人口に匹敵する人が非業の死を遂げています。2003年5月～2009年6月の間に戦乱の地イラクで命を落とした市民は8万～9万人と見られていますが、同じ6年の間に日本で自殺した人の数は19万7000人に達しています。すでに「平和ではない」状態に入っているといえます。「無縁社会」は、都市と地方の対立、世代・親子間対立の激化を招き、国家、自治体、企業、家庭などあらゆる組織を構成する「信」を崩壊させます。

こうした内部崩壊が始まると、為政者は国外に対立をつくり、戦争に導くことによって既得権益を維持拡大させ、相手国民と自国の大衆を犠牲に社会秩序の再構築をしてきました。たとえ戦災により人口が半分になっても、勝敗にかかわらず、戦争で生まれた部分的ながら強固な「信」をもとに、もう一度やり直す。カントは国内が「平和ではない」状態に至ると外部に敵をつくり、対立を生むことによって内部の結束を図る戦争のサイクルを、見事に言い当てているといえます。

しかし核拡散と複雑に入りこんだ経済・金融の依存関係により、このサイクルが機能しなくなり、世界規模で閉塞感が広がり、ある意味では社会主義との対立によって発展してきた文明が、行き詰まっています。

朝鮮半島と日本列島を核の空白地帯に

新たな繁栄の時代に入るためには現代平和学における3要素を踏まえたパラダイムシフトを必要としています。それは、人類の特性から考察した「人間の定義」から始まります。核拡散の時代の平和は、「政府に創ってもらうもの」から、「すべての人が一緒になってつくるもの」へ変わりました。その分水嶺が2010年です。

「飢餓と殺戮のない社会の創造」という切迫した目標に向けては、人類は結束できます。衣食住が足った後の社会で、究極の目的といえる「楽しく持続的に生きられる地球社会の創造」に向けては、多様な価値観を含むため、人類はバラバラになっ

てしまいます。

ひとつの文明が終わるとき、それまで起こらなかった大きな問題が生じます。その大きな問題は、それまでの延長線上に解決策を見出すことはできません。新たな思考の枠組みによる、新たな文化の創造、すなわち近代軍隊の誕生から始まったといわれる教育に代表される洗脳の文化から、覚醒の文化へのパラダイムシフトによってしか克服できないのです。

「楽しく持続的に生きられる地球社会の創造」という目的に収斂させるには、科学・技術の到達水準がカギになります。

その理由はまず、核兵器と、その運搬手段の発達によって、いわゆる「全面戦争」「総力戦」が不可能な状態になったこと。二つ目がITと物流の発達による世界的なコミュニケーションが可能となり、それによって諸事象の検証、会話が可能になったこと。三つ目は、広島・長崎の原爆被害や核実験などの被害についての認識が広がり、核拡散の危険が現実の問題となったことです。

この3つの要素を目の当たりにしている今こそ、人類は、核削減のプロセスから、「楽しく持続的に生きられる地球社会の創造」という目的に限りなく近づく、人類史上初めての黄金の時代環境が整いつつあるのです。そして、朝鮮半島と日本列島こそがそのコア（核）となるものと確信します。

核削減のプロセスの始まりは、米国のオバマ大統領が2009年4月にチェコのプラハでの演説で「核兵器を使用した唯一の核保有国」としての道義的責任に触れ、9月の国連安保理におい

て「核兵器のない世界を目指す」全会一致の決議を行ったことです。核兵器廃絶決議は核兵器のない「結果」に重点をおくのに対して、今回のこの決議は廃絶に向かう過程に重点をおいています。

この決議を現実化させるのは、「究極の火」で武装した核大国（中国・露国・米国）の結節点にあり、日本海＝東海と北緯38度線（DMZ）という空間があり、韓国併合から100年、朝鮮戦争から60年という時間を経て形成された、制御された対立エネルギーが持続している朝鮮半島と日本列島しかありません。

ここに大国間のパワーが制御された核の空白地帯ができれば、環境、生命科学の最先端の研究とインフラ整備、その実用化と普及を通じて人類の特性が開花する文化が生まれます。

東西冷戦のさなかに趙永植慶熙大学校学園長が21世紀人類のモデルとして提唱したオウトピア、中国の和諧社会、米国のスマートパワーともあいまって、和而不同から生まれる「和譲」から、人類の新たな歴史が始まるときを迎えていると確信しています。（巻末参照）

「君子和而不同 小人同而不和（君子和して同ぜず。小人同じて和せず）」（論語）は、「和」と「同」を峻別しています。「これから和 賢哲に学べ」（武藤信夫著）にも述べられています。

人類史に対する「戦後責任」

1994年、中国の李鵬首相が、オーストラリアのジョン・ハワード首相に向かって「いまの日本の繁栄は一時的なものであだ花です。その繁栄を創ってきた世代の日本人がもうすぐこの世からいなくなりますから、20年もしたら国として存在していないのではないのでしょうか。中国か韓国、あるいは朝鮮の属国にでもなっているかもしれません」という発言をしました。

これは、まさに日本滅亡のシナリオです。隣人が、このような厳しい見方をしていることを、しっかりと認識すべきでしょう。

ドイツのヘルムート・シュミット元首相は『シュミット外交回想録』（岩波書店）でこう述べています。

「国民として悔悟し、悲しみ、恥じる能力に日本人が欠けていることについても同じく述べた。政治指導者の中には、日本には世界、それも特に近隣世界に友人がいない事実を自覚しているものも多い。誰でも友人を持ちたいものである。しかし、どうしたら友人が得られるかを知らない。近隣諸国の猜疑心に対して、理解を示さない。」

また一方では、国民の責任について、1995年の広島大学における講演「追憶、悔恨、そして責任」で、こう述べています。

「日本国民もドイツ国民も、全体として罪悪や犯罪行為の罪を背負っているわけではないのです。けれども、われわれ両国民はその父親父祖の中に、ドイツ軍や日本軍によって侵略・占領された国々の領土とその諸国の数え切れない人に対して、犯罪

行為をしてきたことは確かです。（中略）当然ながらポーランド国民も、今までも、犯された罪を忘れ去ってはいません、オランダ国民も忘れてはいないし、フランス国民も同様です。われわれの近隣たちの中に忘れ去った人はひとりもいないのです。世界中にいるユダヤ人もそうです。そして中国、朝鮮、フィリピンはもとより、日本のすべての近隣の人々もまた、忘れ去ってはいないのです。」

日本、特に島根・鳥取県は飛行機でわずか1時間という距離に韓国、朝鮮があり、その国家誕生と現状に非常に大きな関わりがあります。そして2時間の距離に核大国である中国、露国という隣国がありますが、これらの国々と「真の友人」と呼べる関係になっていません。

それどころか、日本海＝東海呼称、竹島＝独島、尖閣諸島、北方領土、靖国神社、歴史教科書、強制連行・強制労働、慰安婦問題など、たくさんの懸案事項を抱えています。少子高齢化のなか政治、財政、経済がますます悪化し、社会不安も懸念されるなかで、子供たちの世代に先送りするような卑劣な手段が公然と行われています。

2008年5月の訪韓時に日本大使館前で、80歳を超えた元従軍慰安婦の方々の日本に対する抗議活動に遭遇しました。この抗議行動は毎週水曜日に行われており、900回を超えていると聞いています。その雰囲気と回数に強烈な衝撃を受けました。

これは日韓両国家と民族の崩壊につながる本質的な問題であり、日本人はもちろんのこと、韓国人の見識と智慧と勇気が問

われていると気づきました。

人類には「生物としての命」と、他の生物にはない尊厳の命があります。彼女たちは戦争中、大変な受難によって「尊厳の命」を失いました。私たちに日本人、韓国人、人間としての自覚があれば、彼女たちの戦後の長い間の困難な尊厳の命を取り戻す活動を放置することはできなかったはずです。

戦争責任とは、戦争を未然に防げなかった戦前責任、国際法に照らし合わせた戦時責任、そして戦後責任の3つに分類されます。

戦争中に子どもであった世代以降は、戦前責任、戦時責任はありません。あるのは戦後責任です。戦前に作られた日本国内の鉄道、道路、港湾など社会インフラは利用するが、他国との関係から生じた怨念、恨みは先送りするということは許されません。戦後責任とは、戦争に至った経緯と背景、戦闘行為、そして現代社会の問題を調査研究し、その成果を、再び戦争を起こさないことと、恒久平和を生み出す資源として生かすことです。今を生きる私たち日本人はもちろんのこと、豊かになった韓国の方々を含めた、子孫と人類の歴史に対する使命です。

Ⅰ Tがもたらす権力構造の変化

インターネットは核軍拡競争を背景に軍需技術として米国が開発しました。これが一般に開放されて現在の情報化世界に発展しました。私たちが享受しているカーナビも、もとはといえば米国の軍事技術です。情報のやりとりにはほとんどコストがか

からず、個人が簡単に双方向での映像通信ができるようになりました。人類の知性が急速に広がり、権力構造に大きく影響を与えるようになってきました。2003年2月の韓国の大統領、2009年1月の米国大統領は、ITが誕生させたといっても過言ではありません。

当社は1973年の第1次オイルショックの年に誕生しました。私は2年間大阪暮らしを通じて人間学とビジネスの基本を学び、ふるさとに帰り、10万円の資金で会社を始めました。当社発展のきっかけになったのがシートシャッター「門番」です。高速道路が全国とつながり、ファクシミリの普及、工場の3K追放とバブル景気によって、全国展開するメーカーという基礎が確立しました。

創業から当分は10円硬貨をポケットに入れて公衆電話で連絡、営業をしていましたが、そのうちショルダーホンという携帯電話の原型が登場しました。それからあっという間に携帯にデジタル信号を載せることができるようになり、インターネット接続によって携帯がパソコンがわりになる時代になりました。ポケットによる情報量従量課金の概念を導入したNTTドコモのDOPA網と、それまでの配電盤製造と上下水道計装の技術を組み合わせ、「やくも水神」ネットワークシステムをつくりました。現在、このシステムは全国5000カ所で稼動しています。

マイクロソフトがウィンドウズで世界を制覇しました。そしてヤフーの登場以後、世界連邦を意識してつくったのがグーグルの検索エンジンです。それに動画のユーチューブがでてきま

した。すべて20代、30代の若い人たちがつくった企業です。

20世紀はメディアの発明とコンテンツの普及、それを使うキャラクターが、らせん状に拡大していきました。登場したばかりのラジオを急速に普及させ、映画配給体制を整備し、スポーツ・セクシー・スクリーンの3Sをコンテンツとして供給することにより大政党をつくったナチスドイツ宣伝相ゲッペルスの手法は、1992年にBBCが制作したドキュメンタリー映像作品『メディアと権力』第1部「大衆操作の天才・ゲッペルス」に詳しく取り上げられています。第2次大戦後はこれにテレビが加わり、2008年には日本国内で3兆608億円（日経広告研究所調べ）の巨費が宣伝費として投じられています。

先に述べたとおり、ひとつの文明が終わるとき、それまで起こらなかった大きな問題が生じます。ゲーム理論を応用した金融経済が実体経済を何倍も上回り、2008年のリーマンショックを契機に失業者の増大など生活の困窮を招く事態に発展してきました。こうした問題は、それまでの延長線上に解決策を見出すことはできません。社会主義と資本主義の対立によって発展してきた社会は対立軸の喪失によって、高次元に向かう昇華か、内部崩壊かの分水嶺を迎えています。

20世紀末に始まったインターネットの一般化は、21世紀にブロードバンド環境が整備されて爆発的に普及し、その知的インフラを整えました。グーグルとユーチューブを背景に、マスコミュニケーションから、「情報の個化」時代に移りました。こうして新たなコンセプトとコンテンツが次々と生まれる環境が

整備され、人類の特性を開花させるため、時代と土地の使命を担ったハイ・キャラクター集団が登場すれば、さらに「ハイ・コンセプト、ハイ・コンテンツ、ハイ・キャラクター」の3Cの発展段階を迎え、人類共生の政治、経済、文化の時代が開けます。

「マスから個」へ教育する時代から、「個対個」「個から全体へ」広がる覚醒の時代へ。軍隊に代表される人を大量規格品化するティーチングの文化から、学びの能力を醸成するコーチングの文化へのパラダイムシフトが、この危機をチャンスに変えます。

核拡散とブロードバンドの進展は、世界の急速な再編を促すため、新たな国家の協力関係を早くつくらねばなりません。そのさきがけとなるのが朝鮮半島と日本列島です。そうでなければ内部崩壊が世界に伝播してしまいます。

世界人類の命運を担っている

1988年、地域の若手経営者たちとの勉強会「知革塾」がきっかけとなり、地域交流や文化、経済交流が進化し、今日の人間自然科学研究所の活動に発展しています。

「人の縁が広がり、未来が生まれる」をコンセプトに始められた「縁むすび世界大会」は、私が遭遇した韓国での出来事で、韓国人の日本人に対する見方を知ったことがきっかけでした。

こうした経緯から、韓国、中国、米国、露国、東南アジア、欧州各国の戦争記念館を訪ね、献花、歴史学習活動続けるな

かで、グローバル時代に人間の尊厳欲求を満たし続ける過程は、「戦後責任を積極的に果たし、対立を統合・発展の契機として生かすなかにのみある」という確信が生まれました。



第2回縁むすび大会、600人が参加した
(1997年3月)

1992年、宮沢喜一首相の初外遊となった訪韓時、盧泰愚大統領（いずれも当時）からの技術供与要請を受け、シートシャッター「門番」を韓国に技術供与しました。そして中国、インド、東南アジアの日系企業工場建設にあわせ取り入れていただき、世界展開の布石を打つことが出来ました。

I Tを使って仮想現実と現実がシームレスでつながって管理できる、新しいシートシャッター「門番」Gシリーズと、「やくも水神」Gシリーズの完成は、社是「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」と、経営理念「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」に向かって大きく踏み出す状況になりました。

この方向性を確かなものにするために、2008年に北京・学苑出版社に依頼して「中日韓英四カ国語による中国古典名言録」を発刊、朝鮮半島と日本列島に人類史的使命に共感した人が世界から集まり、I Tによって新しい知の体系が生まれると呼びかけました。

また、先端技術と文化の進歩によって「自分にとって持続的によいことは、相手にも持続的によいことであり、社会にとっても持続的によいことである」という理論が実現可能となる時代の入り口が、人類史上初めて到来したともいえます。

「和而不同」から生まれる「和譲」を旗印に

「人類に向かって訴える。あなた方の人間性を心にとどめ、そしてそのほかのことを忘れよ、と。もしそれができるならば、道は新しい樂園にむかって拓けている。もしできないならば、あなたがたの前には全面的な死の危険が横たわっている。」ラッセル・アインシュタイン宣言の結びの言葉です。

韓国政府招聘を受けて出席した2009年10月の「安重根義士による伊藤博文公射殺100年」を記念する集会で、鄭雲燐国務総理は安重根義士の絶筆「東洋平和論」中の「合成惜敗、萬古定理（合わされば成功し分裂すれば負ける）」を引き合いに、東洋平和と人類繁栄の精神は、世界の模範となっていると話しました。また安重根義士は「人類社会代表重任」という書を残しています。

この「人類という視点」に立ち、朝鮮半島と日本列島の間に広がる日本海＝東海を「中海」に名称変更し、独島＝竹島を新たな人類文化の発祥の地として拠点化することで、新しい道筋が見えてくると考えています。

日本人は第2次大戦の敗戦国であるにも関わらず、関係国と多くの怨念を維持しながら、ほとんどの国民が飢餓と殺戮の恐

怖から免れ、豊かな生活を享受して来ました。私たちは加害者の子孫として、戦後責任を果たすなかで、日本が相手国の韓国、朝鮮とともに「楽しく持続的に生きられる地球社会の創造」という目的への第一歩を踏み出し、今を生きる私たちと子孫が尊厳欲求を満たせる環境をつくるためにも先頭に立つことが必要不可欠です。

2010年は、人類の歴史上大きな危機が迫り来る年です。それは一方では、世界のパラダイム転換への流れを生み出せる最も大きな機会が訪れていることを意味します。そのチャンスがいまです。これだけの素晴らしい大きな役割を担える時代と場所は、過去の歴史上どこにも、また未来にも有り得ません。この流れは前述のとおり、大きな危機と背中合わせです。

韓国併合100年にあたる本年、島根県内各地にある「竹島の日」に関連した広告塔と、同県による教科書への「竹島」記述働きかけ、日本海＝東海呼称問題等の対立を統合・発展の契機とし、「和而不同」から生まれる「和譲」を旗印に、世界恒久平和のモデルをつくり、環境・健康事業の発展を通じて、新たな人類繁栄の道を拓こうではありませんか。 <了>

一般財団法人人間自然科学研究所理事長 小松昭夫

【和譲】 神道を代表する言葉は「一霊四魂（さきみたま幸魂 くしみたま奇魂 にぎみたま和魂 あらみたま荒魂）」です。そのなかの「幸魂、奇魂」（愛情と知恵）は出雲大社の神語です。これから生まれる和魂（縁から生まれる感動）と、聖徳太子の「和をもつ

て貴としとなす」から「和」をとり、大国主命の国譲り、農政家・思想家の二宮尊徳翁の「推譲」からの「譲」を組み合わせ、熊野大社前宮司で出雲大社教の千家達彦管長がおつくりになった造語。

人類の特性と、グローバル化とブロードバンド、核拡散の時代の人間の条件の再定義から考察した、ジョセフ・ナイ ハーバード大学教授らが発表したスマートパワーを契機に、3つのソフトパワー（感情を加味した知恵、使命、会話力）と、2つのハードパワー（集団組織力、道理を実現するための方便）から全体の文脈の中で生まれる力をいう。

「楽しく持続的に生きられる社会をつくる、私がつくる」という言葉から生まれるマズローの5段階説の上位概念である自己超越実現（私益と公益の一致）、さらに荒魂（勇気と行動力）と先端技術が加わり、社会を変える力を「和譲」と定義。小松昭夫一般財団法人人間自然科学研究所理事長が千家管長のご賛同を得て、愛知工業大学50周年記念事業の映画「築城せよ！」の完成を機に発表した。

【和諧】 現代中国のスローガン。2001年に江沢民氏が中国共産党創立80周年大会で「各国人民と一緒に、永久平和と繁栄する世界を建設するため努力しましょう」と表明したことから始まる。中国共産党はかつての世界革命から和諧世界創造まで、政治理念の歴史的な転換を遂げた。和諧は中国の対外戦略任務となり、紛争地帯に「いくつかの和諧地域」をつくりあげることから恒久平和、共同繁栄する和諧世界を形成するとしている。

【スマートパワー】 ジョセフ・ナイ教授（元国防次官補、米国有数の知日派）らが説く概念で、米国のオバマ政権で用いられるようになった。3つのソフトパワー（感情を加味した知能、ビジョン、対話力）と、2

つのハードパワー（組織力、権謀術数）を「全体の文脈を踏まえて融合する力」を意味する。

【オウトピア】 韓国の趙永植・慶熙大学校学園長が提唱した、21世紀の人類のモデル。英語 ought to（当然そうなるべき）と、ユウトピア UTOPIA（理想郷）を組み合わせた造語。「人間は何であるか、どんな存在か」「西洋哲人の理想国家論」「東洋思想家の理想社会論」を探求する中から、善義、協同、奉仕をうたうオウトピア論を提唱し、推進団体として世界各国に GCS（大協同社会）が生まれた。博士は1981年に国連を通じて「世界平和の日」「平和の年」の設定を満場一致で可決させた。

◆本稿は、2010年の年頭所感に加筆したものです。

※次頁以降の新聞記事は、許諾を得て転載しています。記事の無断複製、送信、出版、頒布、翻訳、翻案等を禁じます。

日時: 2021 年 2 月 22 日 23:32

浜菜みやこ様

大変貴重な経験の場をお与えいただき誠に有難うございました。
先約があり懇親会は失礼いたしました。
講演では新たな提言も行いましたので、原稿をＢＣＣ発信で拡散いたしました。
下記の前書きを付しました。

「特に強調したのは次の諸点です。

1. 平和には母性文化が不可欠である。
2. 母性文化に立脚する母性文明の台頭は弱者の救済及び男女平等の促進に大きく貢献する。
3. 放射能の危険性を無視することへの対策の必要性。440余基の世界の原発は重大な安全保障問題。
こうした認識は核廃絶への関心を身近なものにする。
4. 脱原発の国際化が望まれる。国連倫理サミットは核廃絶への入り口として早期開催が望まれるが、脱原発についての格好の合意達成の場となりうる。日本外交の緊急課題である。
5. 核拡散の防止と原発の促進という両立できない使命を与えられた I . A . E . A , の改革は急務となった。
6. 核エネルギーの軍事・民事利用双方の犠牲となった日本は「核エネルギーは不道德である」と断言出来る。
7. 日本は核廃絶を世界に訴える歴史的使命を有するが、不道德の永続を許さない歴史の法則はその展望に希望を与える。」

今後ともどうかよろしくご指導、ご支援のほどお願いいたします。小松社長によりしくお伝え願います。

村田光平

日時: 2021 年 2 月 22 日 10:52

村田 光平 先生

本日は素晴らしいスピーチをありがとうございました。

お陰様で、Zoom 懇親会も盛り上がり、ウィーン、ベトナム、そして途中から南京大学の学生さんにもご参加頂きました。
未来への可能性が感じられる、大変有意義な国際的な時間の共有ができ、心より感謝申し上げます。
今回のシンポジウムを英語に翻訳し、全世界へ発信したら、との意見も頂きました。
今後について、ご意見を頂ければ幸いです。

「国際 Zoom シンポジウム」実行委員長 小松昭夫
司会 浜菜みやこ
実行委員一同

恒久平和を創る天命を担う日本

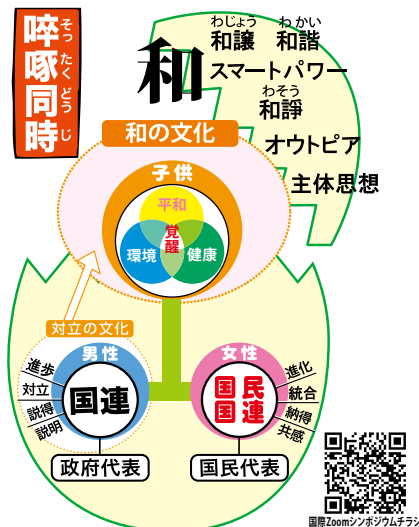
1945年ヤルタ会談で合意された第二次世界大戦戦勝国の5カ国を常任理事国とし、世界平和と加盟国の持続的国益を確保する調整の場

現代平和学を進化、各国の国民の立場を尊重、筋道を立て論理的に議論、共感・対立・統合・発展を繰り返し「和の文化」が生まれる場

出雲大社 神語「幸魂奇魂」を巻頭言に
中日韓英四か国語 中国古典名言録出版



企画：小松昭夫 製作：故 寺戸良信 (2016.2)



北京オリンピックの年に発表 (2008.12)

未来社会を発明 平和・環境・健康はひとつ

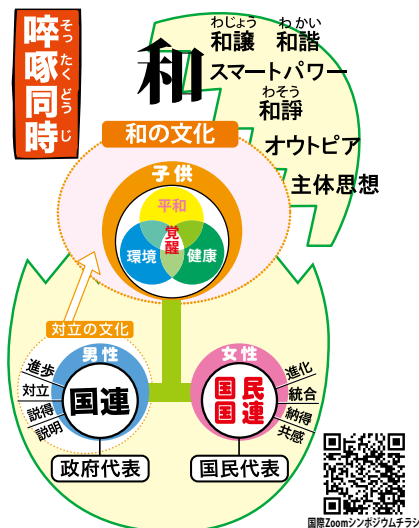
1945年ヤルタ会談で合意された第二次世界大戦戦勝国の5カ国を常任理事国とし、世界平和と加盟国の持続的国益を確保する調整の場

現代平和学を進化、各国の国民の立場を尊重、筋道を立て論理的に議論、共感・対立・統合・発展を繰り返し「和の文化」が生まれる場

出雲大社 神語「幸魂奇魂」を巻頭言に
中日韓英四か国語 中国古典名言録出版



企画：小松昭夫 製作：故 寺戸良信 (2016.2)



北京オリンピックの年に発表 (2008.12)



ホームページ

2021年2月22日
平和・環境・健康はひとつ
国際 Zoom シンポジウム



ホームページ

人間自然科学研究所
関連書籍

ラジオたんば経営セミナー 梶原四郎のトップインタビュー

聞き手／元NHKアナウンサー 梶原四郎 氏

(ラジオたんば経営セミナー1998年3月号収録)

倒産、ルンペン暮らし、そして創業

梶原 小松さんの会社は松江市に本社があり、今年の2月で創業25周年とうかがっております。会社案内を参考に、現在の事業内容をご紹介しますと、「コンピュータと制御装置・センサーを系統的に組み合わせて、新しいテクノロジーに挑戦する制御システムメーカー」です。最近では、上下水道施設の遠方監視自動制御装置をはじめ幅広い展開をされているということですが、もともとは制御装置や配電盤などのメーカーだったわけですね。

小松 創業は昭和48年2月で、10万円の現金と5万円の中古車、それに工具箱一つからのスタートで、弟と二人で始めました。

梶原 元手が10万円ですか。

小松 それでポンプの修理業からスタートしたのです。修理というのは現金収入ですから。そして次はポンプの販売ですね。

梶原 ポンプといってもいろいろありますが、どんなポンプですか。

小松 当時、島根県では水道が普及していなくて、家庭用の井戸ポンプというマーケットがあったんです。それと、トイレが汲み取り式から小さな浄化槽を備えた水洗式へと移行する時期で、これに使う排水ポンプ。また、田舎でも学校やショッピングセンターが次々に改築されるようになって、コミュニティプラント（合併浄化槽）が設置されるようになってきて、それに使われる汚水ポンプ。そして次はプラントの心臓部である電気制御装置という具合に展開していったんです。

梶原 いわゆる「農村の近代化」に貢献したわけですね。

小松 そうですね。

梶原 お生まれも松江市ですか。

小松 松江から南に12kmほど山手に入ったところの、八束郡八雲村の出身です。

梶原 「やくも」は「八雲立つ出雲八重垣……」の八雲で、出雲の枕詞ですね。

小松 そうです。そこに熊野大社という神社があるんです。全国に熊野神社はたくさんありますが、その元祖という説もある神社です。その近くで創業しました。

梶原 ご生家は農家ですか。

小松 もとは地主です。

梶原 地主の跡継ぎだったのですか。

小松 祖父の代で分家して、私で3代目です。戦前は割と裕福な生活をしていたようですが、戦後の農地改革で農地がほとんどなくなり、父が3反歩ほど残った田んぼをもとに生計を立て、家族8人が何とか生き延びていった。そういう中で、私は育ったんです。

梶原 地主の長男としてお生まれになったけれども、そういう状況の中で高校を卒業され、すぐ就職なさったわけですね。

小松 私は小学校の頃から薬草を採って売ったり、筍の皮を拾って売ったり、あるいは父の作った花を、12km離れた松江市内に自転車で売りにいったり、そういう生活をしていました。収入があまりないものですから。父は電力会社の総務、つまり事務屋でしたが、これからは事務屋では大変だということで、男の子は皆、技術の道に進ませました。6人兄弟のうち男は3人ですが、私は機械、次男は電気、末弟は化学の方に進みました。いずれも高校ですが、それで社会に出ていったんです。

梶原 それぞれ理工系、今で言う理系ですね。

小松 高校ですから、どちらかというと言職人という領域でしょうね。

梶原 それで、就職されたのが農業機械メーカーでしたね。

小松 私の家から7kmほど離れたところの東出雲町に佐藤造機という会社があり、昭和38年に松江工業高校の機械科を卒業し、その会社に入りました。島根県内の製造業で上場企業はそこ一社で、研究開発部門もあり、全国展開もしている、当時の地元では良い会社だったんです。

梶原 どんな農業機械を作っている会社だったんですか。

小松 耕耘機、テーラー、もみすり機、脱穀機などです。農業機械の総合メーカーとして、日本でも3本の指に入る会社でした。

梶原 当時は農業近代化まっさかりの頃ですから、まさに右肩上がりの時期に入っていたわけですね。

小松 ええ。

梶原 どんな仕事をされていたんですか。

小松 製品開発を手がける中央研究所に入り、耕耘機のトランスミッションや油圧機器の設計を専門に、8年間ほど勤めさせてもらいました。

梶原 そのままずっと勤め続けられなかったのは、どうしてですか。

小松 昭和46年に経営が破綻して、会社更正法の適用を受けることになったんです。

なかなか引き受け手がなかったのですが、半年目によく、管財人とし

て三菱重工から早川さんという方が来られて、そして現在、三菱農機ということになっているんです。私は、3月の倒産後半月くらい様子を見まして、「自分は新しい道を拓こう」ということで辞めました。当時、社員数は1200～1300名で、私は26歳でしたが、私が辞めて以降、若い人たちがかなり辞めましたね。

梶原 辞めてどうなさったのですか。

小松 辞めて、自分で事業を起こそうと考えていました。ちょうど、父が選挙に出て落選し、家庭も経済的に苦しかったものですから。

梶原 それは地方議員の選挙ですか。

小松 そうです。大体、落選しますと借金が残ります。しかも、弟も失業中で、一家がすべて収入がなくなるという事態になりました。ところが、元地主ですから出すお金は付き合いでたくさんいる。家もかなり大きいので、普通のサラリーマンの収入ではその維持も難しい。これはもう自分で事業を起こすしかないかなと思ったわけです。そして、同じやるなら技術者として理想的な職場を作りたいという気持ちもありました。最初は、8年間設計をやっていたので、設計事務所をやろうと思いました。それで、大阪に設計事務所を開くための勉強に行ったんです。

梶原 出雲から初めて大阪へ出てきたわけですね。

小松 ええ。半年ほど設計事務所に勤めました。ところが、これは将来なかなか難かしそうだということがわかって、また、どうも自分にはちょっと合いそうにないと感じて、辞めました。その後は、ルンペン暮らしをしまして……。

梶原 ルンペンですか。

小松 パチンコ屋に行って、拾ったパチンコ玉で稼いで生活するというような……。

梶原 それは大阪でですか。

小松 ええ。

梶原 なぜまた、半年で飛び出してしまったんですか。

小松 入った会社に限ってのことで、他が全部そうだということではないのかもしれませんが、そこでやっていた機械設計というのは「紙1枚いくら」「1時間いくら」なんです。技術的なことでいろいろアイデアを出しても、お情けでプラスアルファをもらうだけ。こういう世界でした。

梶原 月給というよりは、今でいう採用労働制みたいなものですね。

小松 まあ、そうですね。これでは付加価値が非常に低いし、どこかに応援に行くというような形だから、主体性も持てない。

梶原 やはりその頃からですか、一国一城の主になってやろうと思われ始めたの

は。

小松 私けっこうサラリーマン時代楽しくやっていましたので、そんな気持ちはさらさらなかったですね。倒産しなかったら、独立しようなんて考えは起きなかったと思います。

梶原 ルンペン生活というのは長かったのですか。

小松 半年ぐらいです。これじゃだめだと思いまして、会社を作るには物を売る勉強をしなければというので、商社に入りました。従業員10人ぐらいの、小さな機械商社でしたが、そこで物を売ってお金に換えることを学んだんです。その時初めて、手形、小切手、納品書などが一体どういうものかがわかってきたんです。

梶原 地主さんの御曹司でボンボンで育ってきて、初めて世間の波にもまれたということですね。

小松 そうですね。それと、研究所に8年いたので、お金ということに直接関係なかったですからね。

梶原 ということは、商社での経験はかなり良い勉強になったわけですね。

小松 ええ。それがあったからこそスタートできたと思うんです。

梶原 それで、いよいよ自分で事業を始めるということで、出雲へお帰りになった。

小松 そうです。

梶原 それが昭和48年ですか。

小松 47年の暮れに帰って、翌年の2月まで準備にあて、2月10日にスタートしました。当時まだ建国記念日というのは決まってい wasn't でしたが、戦前の紀元節を2月10日と思い違いして、それに合わせようと思い、その日に創業しました。

梶原 2月11日ですね、建国記念日は。1日早かったわけですね。

小松 ええ。それと、当時は失業支度金といって、失業して再度就職したり、自分で事業を始めたりすると支度金がもらえたんです。その待機期間というのがあって、その間に事業を始めるとお金がもらえないわけです。そういうこともあって、47年12月の初めに大阪から帰り、翌年2月10日に創業と決めたのです。それまでに、実家の納屋、農業用の物置ですが、そこを改造して作業場を作りました。自分たちでベニヤ板やアルミサッシを買ってきましてね。創業までの間をそういう準備にあてたんです。

梶原 まさにご生家の納屋が創業の地になったわけですね。その時の社名は、小松電機産業ですか。

小松 いえ、小松産業という名前を付けました。マーケットが見えないため、何をやっていいのかよくわからないので、「産業」と付けておけば何とでも

なるんじゃないかと思ひましてね。ポンプの仕事から始めて、次第に電気の仕事が増えていった1年後に、真ん中に「電機」の文字を入れて小松電機産業とし、法人化したのです。

梶原 それが冒頭でお話になった、弟さんと2人での、10万円の元手とポンコツ車1台からの創業ということになるわけですね。それで、順調にいったわけですね。

小松 順調というか、お金を借りて始めてませんので、現金収入を得て、次の仕事のための部品を買ったり、経費を払ったり、残りを何とか小遣いにあてたりというような感じでしたね。

シートシャッター「門番」のマーケットを創造

梶原 小松さんのことを書いた本に「神話の里・出雲の国が生んだ革新的な起業家」とありますが、その所以をこれからおうかがいします。小松産業を創業された昭和48年は第1次石油ショックが起き、大変な年でしたよね。

小松 何かを持っている人にとっては大変だった。しかし、何も持たない人間にとっては逆にチャンスだったわけです。どういうことかと言いますと、オイルショックは秋からでしたが、その頃にはある程度仕入先もできていたし、いろいろなことも少しずつわかりかけて、何とか食えるようになっていました。それで、私が元居た大阪から材料を仕入れて帰り、ちょっとした物を作ると、2〜3ヵ月で、その材料がものすごく値上がりするわけですよ。ですから、オイルショックがあったからこそ、10万円のお金があったという間に200〜300万円になったというわけです。

梶原 「焼け太り」という言葉がありますけど（笑）。

小松 そうですね（笑）。

梶原 しかも、転んでもただでは起きないという。

小松 プラス面のあるいい所に転んだということじゃないでしょうか。石油を原材料とする樹脂系のもの、たとえば農業用ポンプに使うサニーホースや、樹脂被覆電線などがものすごく値上がりした。そういうものを大阪の仕入れルートで買って、田舎へ持って帰ると、いい値段で売れたんです。しばらく置いておくと、また上がったりして。

梶原 その後、昭和60年に高速シートシャッター「門番」を開発されて、大ヒットしたということですが、配電盤からシートシャッターに転じられた動機は何だったんですか。

小松 プロセスを整理しますと、最初はポンプの修理ですね。修理というのは現

金収入で、お客さんができる。できたお客さんに、今度は仕入れた新品のポンプを持って行って売る。そうすると、商いの金額も増える。次は、ポンプを動かすための制御装置を作った。それには技術料等、非常に高い付加価値がつく。制御盤は鉄のケースに入っているのですが、次の段階で、そのケースを製作しました。しかし、ポンプの制御盤だけだと田舎にはあまりマーケットがないので、ビル用の配分電盤の分野に進出したんです。そうするうちに、昭和60年に建設不況に見舞われました。まずゼネコンがあって、次に電気工事会社、その下に配電盤メーカーという構造になっていますから、建設不況になると、配電盤は半値八掛けという世界に入ってくる。そうすると、将来の展望の開けない厳しい状況に陥るわけです。そこが一つの転機になりました。建設不況の5年前の昭和55年に、私がかつて勤めていた佐藤造機の後裔である三菱農機からシートシャッターの開発を依頼されていました。山陰では、冬は北西からの季節風が吹くので、工場で働く人たちが寒いんです。5年間で30台を生産して、三菱農機や関連の会社に売りながら改善を重ねていたのですが、その不況を契機に、商品として展開できるシートシャッターを開発して、発表したんです。

梶原 シャッターというのは普通は金属製で、いわゆるよろい戸ですよ。それをシートで作られた……。

小松 これはどういうことかと言いますと、機能を分解して考えたわけです。シャッターやドアというものには、まず防犯という機能がありますね。次は、埃が入らない、風が入らない、虫が入らないといったいろいろな機能があると思うのです。そこで、防犯だけは鉄のシャッターやドアに任せて、他の機能はシートでやらせようと機能分解したわけです。たとえば、窓にも雨戸があって、その内側にガラス戸があって、夜は雨戸を閉め、昼は開けて、ガラス戸あるいはカーテンというような機能分解になっているわけですね。ところが、建物の出入り口を機能分解したものがなかった。たまたま、そういう需要が、寒いのが故にあったということです。それまでは、人が荷物を運んでいましたが、次第にフォークリフトが多く使われるようになってきた。春から夏にかけてはドアを開けっ放しで出入りしてもかまいませんが、冬場は工場内の作業員から「寒い」と苦情を言われる。かといって、いちいちフォークリフトから降りてドアの開け閉めをするのは面倒くさい。そこで、ビニールのれんがつけられるようになりました。ところが、擦れて傷がつき、そこに油污れが付着して、前が見えない状態になってしまう。それで、反対側に人がいたのに、フォークリフトが突っ込んで大きな労働災害が起きてしまった。そのことをきっかけに、ビニールのれんに代わるものはないかという依頼を受けて、シートシャッターの開発に

着手したわけです。アイデアは三菱農機さんからいただいたんです。

梶原 シートの材質は何ですか。

小松 ターポリンといいまして、糸を格子状に3～5mm間隔に編み、その両側から透明なビニールを貼り付け、表面にフッ素樹脂コーティングをした素材です。

梶原 それでシートシャッターですか。

小松 このシートは、九州鹿児島県の学校のプールを火山灰から護るために開発されたものです。昔、紫雲丸事件というのが四国の方で起きました。実は、そのとき松江の子供が大勢亡くなった。泳げない子供がたくさんいたからです。これが一つの契機になって、文部省が全国の小中学校にどんどんプールを作るようになった。それと、もう一つは日本の工業化とともに河川が非常に汚れていったということも背景にあったと思います。そうしてプールを作ったのはいいけれども、鹿児島には桜島があってしょっちゅう噴火する。周囲が水を使わない夜中に2晩も3晩もかけてせっかく水を貯めたプールに、噴火のたびに火山灰が入ってしまっていて使い物にならなくなってしまっているわけです。そのために、プールをシートで覆うという仕事が出た。当時、そういうシートは日本にはなかったんです。そこで、たしか当時の日本船舶振興会が資金を出して、桜島等火山地帯専用のシートを開発させた。ところが、プールに一通り取り付ければ終わりですから、その素材があまり使われない状態であったわけです。そういうシートと出会いがあったわけです。

梶原 それをまた利用したわけですね。

小松 ええ、たまたまそういう出会いがあった。ちょうどいいところへ転がったわけです。

梶原 シートシャッターには「高速」「ハイスピード」と付いてるんですが、これは上げ下げが高速という意味ですか。

小松 そうですね、普通のシャッターの約20倍、速いものは30倍となっていますが、それぐらいのスピードで上がるんです。

梶原 パッと上がるんですか。

小松 そうです。開発当初は、上がる時も下がる時も約0.7m/秒で同じスピードでした。最近のものは、上がる時は1.4m/秒、下がる時はその半分の0.7m/秒です。下がる時あまり速いと危ないものですから。

梶原 センサーか何かで自動的に上下するんですか。

小松 はい。開発当初は超音波センサーでしたが、最近は赤外線センサーを使っています。

梶原 それが「門番」という商品名で売り出され、大変なヒットとなり、ニュー

ビジネス大賞を受け、一躍、小松電機産業株式会社の名前を全国に知らしめたのですね。

小松 はい。

梶原 それだけ需要があるということは、それまでの金属製のシャッターなどを使っていたものが、「これは便利だ」ということになったのでしょうか。

小松 そうですね。私自身は、そういうマーケットが日本にそれだけあるとは、当時全然わかりませんで、やって3年目に「ひょっとしたら、そこそこ行くかもしれない」という気にはなりましたが、まさかここまでになるとは、初めは全然思いませんでした。

梶原 年間にどのくらい売れたんですか。

小松 昭和60年にスタートして、最初の1年間で100台、翌年が300台といった単位でしたから、会社として運営できる数や金額ではありませんでした。

梶原 それが、急速に伸びていったわけですね。

小松 日本列島を縦断する高速道路が開通したこと、ちょうどこの頃がファックスの普及期に重なったこと、それと工場の3K追放というブームに乗れたことなどが、うまく立ち上げられた理由ですね。

商品、サービスなど事業内容の新規性と実績、経済的・社会的貢献度を審査の対象とするニュービジネス大賞は小松電機産業（島根県八雲村、☎0852・54・1166）が受賞し

大賞 小松電機産業



小松 昭夫社長

た。超音波センサーを組み込んだビニール製の自動開閉シャッターの開発が評価された。
小松昭夫社長（47歳）は、ヤッター以上に開閉数が多いため安全性と耐久性を持たせることだったという。今では韓国に輸出、現地生産も計画中。台湾、ドイツに続いてタイにもサンプル出荷で市場を世界に求め

ニュービジネス協議会（略称・NBC、会長・関本忠弘氏）は、このほど九一年度の「ニュービジネス大賞」の受賞者二十七人を発表した。今年は島根県の小松電機産業がNBC大賞を受賞したほか東京、大阪など大都市以外の企業が八社と多数を占めたのが特徴。アントレプレナー大賞は山一カレット、ソフマップの二社で、いずれもリサイクル事業で表彰された。NBCでは「各地域のNBC協議会のネットワークが確立、活動が活発化したこと。環境問題への関心が高いことの反映」と意義つけており、今後地域で地道に活動する各NBC企業との交流を積極的に展開していく方針だ。ここで主な受賞者を紹介す

NB大賞受賞者の横顔

▶上◀

「盛大な表彰式でビックリしました」と喜びを率直に語る。「NBCには未加入で知らなかったが、これを機会に加入することにした」と言う。開発した商品の名称は「門番」。開発時の最大の苦労は「鉄のシ

地方企業

廃棄

（日刊工業新聞 H3.10.30）

梶原 「門番」は相当大きいですね。

小松 当初は、幅5m以下でしたが、今は幅10m、高さは大体4mくらいです。

梶原 ということは、これは簡単に運んで流通させるというわけにはいきませんね。

小松 まったくおっしゃる通り、そこが一番のネックになるんですよ。とくに私どもは島根県、山陰ですが、需要があるのは太平洋ベルト地帯で、なかでも広島や東京周辺が一番多いんです。始めて間もなくの頃は、大きい長尺物も運送業者さんが結構喜んで運んでくれたんですよ。ところが、トラック業界も自動仕分け装置を導入してだんだん小さな荷物を運ぶ、クロネコヤマトさんのような業者が増えてきて、それにともなってトラックの方もアルミケースが付くようになってきて、大きい物を運ぶのを嫌がるようになってきました。4mまでは路線便に載るけれども、それ以上になるとチャーター便で自社で運ばなければビジネスはできない、ということになってきたんですね。その辺が一番、次の展開へのネックになったんです。

梶原 その流通コストを、どんなやり方で下げたんですか。

小松 そこがニュービジネス大賞をもらった理由の一つにもなっているのですが、その当時は「ジャストインタイム」という言葉が流行語でした。

梶原 カンバン方式ですね。

小松 ええ。それをそうではなく、お客様から「希望納期」を聞き、そして私どもの方から「確定納期」を逆に連絡するようにしました。サイズによっても違いますが、4tのロングボディに14~15台積める。そこで、ある一つの地域で14~15台になるようにして生産していく。お客さんに少し待ってもらったり、逆にちょっと早く送ったりしましてね。運送ということを主眼において生産計画を立て、お客さんにお願いして、納期をその生産計画に合わせていただくわけです。

梶原 つまり、ユーザーにはちょっと我慢していただくということになりますね。

小松 そうですね。

梶原 しかし、コスト的にはその方がお得になりますよ、というわけですね。

小松 そうです。それは、シートシャッターという分野、いわゆるマーケットを私が創造したからこそできたのであって、他のどこかがやっていたら、「希望の日にきちんと届けてくれよ」と言われて、どうにもならなかったでしょうね。その後、ライバルメーカーも出てきましたが、マーケットを創造したことによって、こういう納期の決め方が業界のルールになってしまったわけです。

梶原 大ヒットした「門番」ですが、順風満帆というわけにはいかなかったでしょうね。中小企業故に流されてしまいそうになったこともあったのでは……。

小松 それは何回もありますね。最初は、カタログをコピーされて、全国にばらまかれるということが起きました。その会社は、当社から「門番」を仕入れて売りたいと頼みに来られて、私どもも了解した。まさか、カタログをコピーされ、当社の名前は消し、自分の会社の名前を入れて配られるなんて、考えもしなかったですからね。そこは有名な会社でしたから、うちの方がコピー商品扱いされてしまうんです。「門番」というブランドも同じ、カタログのデザインも一緒に、社名だけ違うものですからね。これが一番目の難関でした。

梶原 どう対応されましたか。

小松 すぐ抗議をして、カタログを配布しないように言いました。ところが、全国2000社にダイレクトメールを打たれていたもので、いくら言っても効果がないわけです。ちょうどその頃、シャッターメーカーの中で業界、2の文化シャッターさんから、ぜひ業務提携したいという話がございました。業務提携の内容はOEM契約すなわち相手先ブランド供給という方法でした。そうすると、お客様は「門番」というブランドではなく、文化シャッターの製品である「エアキーパー」というブランドで買われるわけです。私どもは、お客様に対しても、文化シャッターの代理店に対しても、どこにも顔が出てこない。ですから、末端では私どもの商品と競争状態になってしまうわけです。文化シャッターさんの方が販売力があるということになると、極端な場合には下請けみたいになってしまうおそれもあるわけです。リスクはありましたが、先ほど言ったような事情がありましたので、やむを得ず業務提携することにしたわけです。ただし、3つ条件を出しました。「開発費を折半でもってほしい」。それから、「台数契約」。文化シャッターさんは全国に販売網をお持ちですから、どかっと注文を取られて、私どもに製造依頼があった場合、態勢が整っていないと納めることができませんから、それが原因で自分のところで作るとか、あるいはよそに作らせるとかされたら、うちは動きが取れなくなってしまうから、「台数契約」を条件にしました。

梶原 なるほど。

小松 3番目はメディアです。東京と島根の両方で、一般紙・業界紙に、小松電機産業と文化シャッターはシートシャッターで業務提携するということを記者会見で発表してもらおうと、この3つの条件を出しました。

梶原 なるほど。

小松 研究開発費の負担と台数契約については、まだマーケットができていなかったものですからだめだと言われました。そのかわり、大量に注文がきても、それを口実に自分のところで作ったりはしないという確約を取りつけ

ました。そして、3番目の条件だけはのんでもらいました。新聞にも派手に載りまして、そのコピーを代理店に持って歩かせ、「門番」はまちがいでなく小松電機産業が開発したものだということをPRして、それでブランドを取り返せました。しかし、このことが後々の「門番」の販売網づくりに様々な影を落としました。

梶原 大消費地である東京や大阪からかなり離れた山陰、出雲の松江という、このハンディをお感じになりませんでしたか。

小松 それはもう、まず物流でものすごく感じました。

梶原 じゃ、「東京へ出てやろう」というのはなかったんですか。

小松 先ほど申し上げたように、私は農家の長男ということもあって、両親、祖母まで含めて一家の生活を私が全て支えておりましたから。それに、私は小さい頃から決してものごとから逃げない、置かれた状況の中でどうやっていくか、こういう考え方でずっと来ているものですから。もともと、商売をやろうということで会社を辞めたわけでもないわけですし。

「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」

梶原 「門番」は海外にもかなり出たそうですね。

小松 ええ。

梶原 「門番」は現在でも小松電機産業の大きな柱になっていると言えるわけですね。そこで、ここまで成長できた原動力は何だと思われますか。

小松 やはり、運がよかったということに尽きるでしょうか。よく「神の見えざる手に導かれて」と言われますね。商品を開発してお客様に買っていただき、お礼を言いに行きます。いろいろなトラブルも起きます。それに対処する。いろいろな難問も降りかかります。そういったものを一つ一つ解決していく。カタログコピー事件、バブルの発生と崩壊、新規参入の続出、コピー商品の登場など次々と問題が起きましたが、それらを全部真正面からとらえて対処してきたからこそ、今日があると思うのです。だから、何が原動力かと言われると、おそらく次々に起きた問題が、ここまで来られた要因として大きいんじゃないかと思いますね。

梶原 （笑）しかし、新商品は人間が考えて開発していくわけですから、やはりそういう土壌あるいは企業文化、そういうものが育まれていたからだと思いますが。

小松 はい、それは今振り返ってみてもまったくその通りだと思いますね。私が企業を起こす前に、全国展開をしていた農業機械メーカーの研究所に入っ

たことで、全国的視野で見られるようになっていたことが一番大きいと思いますね。それから、日本にはいろいろな機械、電気製品などがありますが、ほとんどが欧米から入ってきたものです。ところが、稲作用農業機械は日本のオリジナリティですね。そういう中で想像力や構想力が育っていったのではないのでしょうか。20歳ぐらいのときに、創造工学研究所の中山正和先生のセミナーを受けたりしましたが、そういう土壌の中で若い時を過ごしたことが、その後の私の商品開発、ビジネス展開、そしてこれからの構想などに一番大きな影響を及ぼしていると思いますね。

梶原 それは、若い社員にも当然、受け継がれていかなければならないことですね。

小松 夢とロマンと使命観の生まれる場と仕組創造のための研究、この辺がこれから一番重要なんじゃないかと思います。それはやはり構想力、オリジナリティ、あるいは自立、そういったことに非常に密接に関係あるんですね。そういう文化が生まれる土壌を地域、日本、そして世界にどう構築するか、ということではないのでしょうか。

梶原 ということは、企業というもののあり方を問い直すことにもなってきますね。

小松 とくにこれからの日本は、欧米に追いつき、追い越せというやり方はもう難しくなっているわけですから、世界が希望の持てる21世紀になるようなきちとした理論体系を確立・実証することが平和憲法を持つ日本が最優先に取り組まなければならないテーマだと思いますね。

企業の目的、社是、経営理念、それを個人ベースまで落としていって、いわゆる人類共通の目的につなげることで、新しい道が拓けると思っています。目的というのは、「目的」と書いてある。目的というのはたくさんあったら的になりませんので、結局それをずっと追求していくと、人類は何のために地球に存在してきたかということを考えて仮説を立てる必要があるわけです。そうすると行き着く先は、地球上のあらゆる人が天寿が全うでき、楽しく愉快に人生を過ごすことができる、それも持続可能にです。この辺が環境問題ともリンクしてくるわけですが、そういう地球の創造ということ、これが究極の目的なんですね。それを具現化する手段としての目標設定が、個人・企業も含め国家の目指すところです。ここに焦点を当てなかったら、共生ということもありえないわけです。

梶原 今、社是という言葉が出ましたが、「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」というのが小松電機産業の社是だそうで、これが大きく会社の壁に掲げてあるそうですが、意味するところは？

小松 初期は家族と自分が生きるために、そして社員が入ってきたら2度と佐藤

造機のようにならないためにはどうすればよいかということで、そのためには貯金してということで、お金を追いかけてきたわけです。そして、まあ半年や1年はどうこうあってもその貯金で食いつなぐことができると、こういう会社づくりをやったわけです。ところが、途中から、先輩ライバル会社と真向からぶつかるようになりまして、今度はそこに追いつき、追い越せということでやっていました。

あるとき、会社の存立目的、何のために会社をやっているのかということ、ある先生から指摘され、はたと困りまして。そして、その先生から「社是が必要だ」と教わったのです。しかし、私はエンジニアですから、社是と言われても何のことかわからない。先生は「会社を経営する目的です」と言われる。そこで、「何かいいのがあったら教えてもらえませんか」と言ったら、「いや、それは教えられるものではなく、自分で考えるものだ」と言われましてね。いろいろ考えたのですが、勤めていた会社が倒産した26歳の時にたまたま辞世の句を作っておりまして……。

梶原 辞世の句を26歳で（笑）。

小松 （笑）そういうこともありまして。それがヒントになりまして、会社を創立して8年目の1981年に、人に喜んでもらうことが会社の目的だということで、「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」を社是としました。その時に、世襲制を取らないことを発表したのです。そうは言っても、ついグラグラしがちなものですから、国道端に縦1.5m、横8mほどの看板を立てて、広く公表しました。そうしておけば、いろんな人が毎日見て通りますので、看板に偽りがあっちゃいけないということで、背水の陣をしいたわけです。

梶原 先ほど「会社というのは社会を変革するものでなくてはならない」と言われたのも、そういうところから来ているわけですね。

小松 ええ。

梶原 普通は、会社は利潤追求ですよ。しかし、そこからもっと目を広げて、やはり会社というのは地域社会の一員であるという考え方によるものですか。

小松 私は会社という概念を、「家業」いわゆる生業ですね、「企業」、「事業」と3つに分けて考えています。「企業」というのは企てる業で、企は「人を止める」と書いてあります。でも、人というのは移ろいやすい心があって、足もついておりますので、なかなか止まってはくれない。それを企てることによって、こちらの方を向いてもらい、商いをする。ところが、移ろいやすいわけですから、すぐに向こうに行ってしまう。そこで、また企てる。そして最後にはヘトヘトになる、ということは初めから決まっているんじ

やないかと（笑）

衣食住が足りない社会、あるいは生命の危険を顕在的に感じているという
ような時には、それが解決するまでは一つのパターンで人は動くわけです。
ところが、衣食住が足りてしまうと、よく価値観の多様化ということが言
われますが、非常に移ろいやすくなってしまいうということですね。そう
なると、どうしてもお客に迎合するようになって、ますます企て続ける。そ
して、最終的には「忙しい、忙しい」となる。「りっしんべん」に「亡」
と書いて「忙しい」ですけど、一番大切なものを、「亡」の下に「心」で
「忘れ」て、最後にはちょっとボケてお「亡」くなりになると（笑）、こ
ういことになると思うのです。そういう社会状況になった時、人心をどの
ようにもっていくかということのための活動、これを私は「事業」と位置
づけているんです。

企業活動というのは、一般的に船に見立てられます。立派で、堅牢な船体^{けんろう}
を造り、船内にいい設備を整え、船員みんなが楽しくやれて、そうして船
団を引き連れて大海原を航海するというのではないかと思います。

「事業」というのはそういうことではなくて、海を作ることだと。海があ
って船は初めて活動できるわけですね。嵐が来るとなれば、船は港で待機
する。しばらくすると自然界は凧になるので、それからまた出て行けばい
いわけです。「企業」というのは人の海の中に浮かんでいるものです。だ
から、人心がどんどん荒れてくると、企業もそれに合わせざるを得なくな
ってしまふ。そうすると、気がついたときには持続不可能な状態になっ
ているわけです。自然界と違って、人の心というのは、人間が意志を持って
荒れを静めないと崩壊してしまふ。これは、歴史を見れば明らかではない
かと思うわけです

「中庸」

梶原 最近、大企業を中心にいろいろ取り沙汰されるような事件が起きていま
すが、企業経営者の倫理といいますか、起業家、事業家、あるいは経営者
というのはどうあるべきだとお考えですか。

小松 一言でいうと「中庸」に尽きると思います。日本実業出版社から出ている
『経営者会報』の97年11月号に、頼まれて巻頭言を書きました。その中
に書いたことですが、結局「生かされながら生きる」ことが、私の考える
「中庸」であると。

自然環境と、たとえそれが不合理なものであったとしても、現在も含めた

歴史の中に築かれた社会環境に生かされ、そして人類究極の目的に向かって社会のあり方を変えるべく協調と戦いを繰り返しながら、社会をあるべき姿に変えていく。これが人間本来の生き方ではないかと。ただし、生かされながら生きるということになると、明確な目的と目標がないところには「生きる」という主体性が出てきません。その辺がポイントではないかと思います。

梶原 小松さんの考える「目標」とはどういうものですか。

小松 人間というのは大体陸の上で生活しています。そうした時に、その土地つまり自然界の特性と、それが与える人間への影響を真摯に研究する。これは地政学的な研究ということになります。それともう一つは、突然「今」があるわけではなく、歴史の集積の上に「今」があるわけです。これもよく調べてみる。こうした地政学的、歴史的な研究を深めれば、人類究極の目的を具現化するための「目標」すなわちその地域の役割が自ずと定まってくるはずで。そのように考えれば、「目的」は一つであっても、「目標」はその土地、人によって無数に存在するはずで。

梶原 そういう観点から、小松さんは社会での活動、企業の外へ向けての活動というのをいろいろおやりになっているわけですね。例の全国的にも問題になった中海干拓事業、これに対する独自の構想も、そういう観点あるいは信念に基くものですか。

小松 ええ、もちろんそれから生まれてきたものです。

梶原 あれは国家事業ですね。これに対して、民間の一企業経営者として発言されているわけですが……。

小松 日本は一応、主権在民の民主主義国家ということになっていますから、国家の問題は国民一人一人の問題なのであって、それを国と個人という具合に分けて考える方が、非論理的だと私は思ってるんです。国家事業は一人一人の国民の事業であり、地域の人一人一人の事業でもあるわけです。だから、対立する概念ではなく、国の問題は我々国民の問題を内包しているということではないでしょうか。昨今の日本のように、G N P世界第2位ともなれば、アジア、世界の中の役割という視点も必要不可欠ではないでしょうか。

梶原 中海干拓というのは昭和20年代に閣議決定されてスタートしたということですが、この間に農業事情が変わり、農地を造成してもしようがないという状況になってきて、今中断されているわけですが、これに対する小松さんの対案とは、具体的にどういうものなのですか。

小松 これは、森清先生にお書きいただいて、ダイヤモンド社から出版されました『母なる中海』という本に詳しく載っております。また、ビデオも作っ

ております。一言でいいますと、中断しているという現状、そして今までの経過、それを全て一回受け入れる。そして、それを現在の社会情勢、あるいは将来を見通した中で、当初の計画通りやるよりも、もっと大きな効果が期待でき、今いる人たちが元気が出てくるようなことをする。ただし、世の中が非常に不安定になってきていますので、いつどういうことが起きるかわからない。仮に私の言っている方法でやったとしても、途中で中断ということも起こりうる。その時に「副作用がない」ということが大事です。

それからもう一点は、こういう事業をやることが日本の安全保障につながる。あるいは世界の大きな問題を解決するための一つのモデルになる。たとえば韓国、ヨーロッパ、またアメリカ等にとっても、「これは一つの参考になる」と受け止められるような形にもっていくことが、G N P 世界第2位という国の果たすべき役割ではないかと思うわけです。

梶原 「そこで21世紀型の産業を起こす」と言っておられますが、具体的には干拓をしないということですか。

小松 しないというわけではありません。ひっくり返したんですよ。実は、中海岸本庄工区というのは1400㍓あって、それを囲む堤防も、ポンプ場もすでに完成していて、あとはポンプを動かして水を外に出せばすぐ干陸できるというところまでできてるんですね。そのできてるものは100%そのまま使うというのが私の提案ですが、それはともかく、その水を外に出すために水路が設けられている。その水路の部分の逆を埋め立てて、これから干陸するという部分はそのまま水面として残すんですよ。逆転の発想なんです。そういう具合にしますと、さっき私が言ったこと全てが論理的にもつながる。

しかし、そのためにはいわゆる省水型、少ない水で農業をやり、文化的な生活も可能となるような、そういうキーテクノロジーを開発する必要がある。たまたま私は、会社スタート時からポンプを扱い、以来ずっと水に関わり続けてきました。そういう中で、バイオテクノロジーを利用する水処理技術の専門家の岸博先生との出会いがあって、そのキーテクノロジーを事業化するめどがついたものですから、それで「じゃあやろう」ということで、第一歩を踏み出したわけです。

梶原 そのために研究所などを設立されたりなさっているわけですね。そうすると、小松さんが現在やってらっしゃることは、小松電機産業という会社の経営の部分よりも、むしろその外部の社会に向けての活動の方がウェイトが高くなっているわけですね。

小松 そうですねえ、「V S O P」という言葉がありますね。サントリーのお酒

にもありますけど。若い時はV「バラエティ」に「バイタリティ」。いろんなことを一生懸命やる。そすしますと一つくらいものになるものが出てくる。それがS「スペシャリティ」。ところが、社会はなかなか自分の思うようにはいかない。いろいろありますので、そこで自分なりの人生観というものができ上がる。そうするとO「オリジナリティ」、余人をもって代えがたいというようなものができ上がってくるのです。そのうちに、身内の人間や友達などが亡くなるということが起きてきて、死というものを自分の中で現実の問題として考えられるようになり、弁証法的な考え方が身についてくると、P「パーソナリティ」ができてくる。人はそういうプロセスを経て成長するものだと思うんですよ。そうした時に、創業者というのはどうしても自分の会社に非常にこだわりますので、なかなか後継者の養成というのは難しいんですね。だから、自分の会社よりも他のことの方に目が向きますと、結果として後継者が育ちやすい環境が生まれるんじゃないかなと（笑）。

梶原 社長は「元気で留守がいい」（笑）。

小松 大体、昔から一番良い子供の教育は親が死ぬことだと言いますから（笑）。

梶原 ちょっと会社の話に戻りますが、これからの事業展開戦略というのは、どうお考えですか。もっと多角化しようとか、海外展開をもっと広げようとか、そういうお考えはありますか。

小松 「門番」はニュービジネス大賞をいただきましたが、その受賞披露パーティを島根県で開きました折に、ご縁があった韓国企業の「東友」、現在の「東宇技研」に技術の無償供与をすると発表いたしました。これは、その当時の宮沢喜一首相が韓国に行かれた時、「最近、日本はちっとも技術を教えてくれない。帰られたら、もっと韓国の人たちに技術を教えてくれるように、あなたから言ってください」と韓国側から言われたという記事を読んでいたものですから。それと若い時、韓国でいろいろなことを経験しておりまして。やはり島根県というのは韓国と……。

梶原 近いですね。

小松 歴史的にもいろいろなつながりがあります。そういうことで、ちょうどいい機会だと思って、「門番」の技術が無償供与したわけです。それで、韓国でも6割以上のシェアになっております。

梶原 さらに海外展開することを考えておられますか。

小松 ええ。基本的には、全世界に技術の無償供与ということでやっていこうと考えております。

梶原 会社の合い言葉は「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」だそうですが、これはどういうことですか。

小松 人類は何のために生まれてきたのかと考えていきますと、結局、「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」生きられる地球を創るためじゃないかと、それも持続的に。こう考えると、大体世の中うまく行くようになってるんじゃないかなと（笑）。

梶原 なるほど（笑）。

小松 何を目的にし、それを具現化するための手段としての目標に何を設定すれば持続的にそのようになれるかということを研究した結果得た言葉です。論語の中に、物事を勉強して「知ってやる人」は「好きでやる人」にはかなわない、「好きでやる人」はこれを「楽しんでやる人」にはかなわないという言葉があります。もう一つは、松下幸之助さんの『経済百話』というのがあるんですが、その中に「商売のコツ、覚えた価値は百万両」という言葉があるんですね。

梶原 「商売のコツ、覚えた価値は百万両（笑）。

小松 「その心は、天馬、空を行くがごとし、ゆかいなり」というのがあるんです。じゃあ「ゆかい」とはどういうことかを追求していくと、先ほど言いましたように、人類共通の目的を具現化するために、自分の持っている一番の優位性、どこをホームグラウンド、あるいはバックグラウンドにしているかを考えて目標設定する。その目標が正しければ、何でこんなにうまくいくんだろうと思うくらいに、必要な時に必要な人にも出会えて、どんどん目標に近づいていける。これが「ゆかい」で、私これを実感、体得しているものですから。おそらく、このことは人間の脳の構造ともリンクしているのではないかなと思っているんです。

梶原 「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」ということで、ご発展を祈っております。どうもありがとうございました。

小松 どうもありがとうございました。

寄稿

パラダイム転換を促す ビッグプロジェクト

小松電機産業社長 小松昭夫

1944年島根県生まれ
県立松江工業高校卒業後、佐藤造船で農業機械の設計に従事
73年小松産業を設立
中小企業研究センター
賞 ニュービジネス大賞などを受賞

パラダイム転換の日本

「近い将来、アジアの片隅に日本という国があった、という時代がくる」。ある国際的に有名な政治家の言葉である。私も長い間、同じような危惧を抱いてきた。

私たちが直面している状況は、まさしく日本民族存亡の危機といっても過言ではない。一過性の不景気などという認識で彌縫策を弄し、根本的な構造改革を怠れば、依頼心の強い無気力人間と我欲の塊のような人間ばかりが棲む「鬼が島」と化す危険性がある。

経済のみならず、政治、社会、教育などさまざまな局面でいま、一気に噴き出している諸問題の解決策は、従来の思考や認識の枠組みの延長線上にはもはや存在しない。

い。

私は、現在の閉塞状況は、パラダイム転換のためのビッグプロジェクトによってしか打破できないと考える。

中国の諺に、「繁栄の極みに衰退の芽は生じ、衰退の極みに繁栄の芽は生じる」という言葉があるが、私は現在の危機は、将来の繁栄の礎を築くための、またとないチャンスとして生かせると考えている。いまこそ、たんなる景気対策の次元にとどまらない、人間復活を目的とした、歴史の評価に耐える行動を起こすときにきている。

好景気の定義

「景気がいい」というのは、どういう状況を指すのだろうか。物がよく売れ、企業が儲かり、

回り回って庶民の懐や国庫を潤す。これが、表面的な解釈である。だが、私は「個人が楽しく愉快に生きている状況」と定義している。果てしない人間の欲望を活用し、理想社会ができあがる方向に導く。各個人が、その目的達成のため、自分の役割を自覚、それを強制されずに果たして、楽しく愉快に活動している。そういう状況を「景気がいい」というのである。

つぎに、「企業とは何か」。企業の「企」という字は「人」を「止める」と書く。止まる人とは、顧客のことである。企業は顧客、すなわち消費者なしには存在できない。

ところが、人は本来立ち止まることを嫌う。そういう人間を立ち止めておくためには、立ち止まる

ほどの価値のある何かをたえず創り出さなければならない。そういう創造行為が企業活動である。

だから、人間の欲望に歯止めがないように、企業活動も企てに次ぐ企てで進んできた。そのこと自体は非難されるべきことではないが、それにより社会や人間性に歪みが生じるようになってきた。

そういう問題を是正するのが事業家の役割である。私は事業家とは、経済活動を通じて社会変革をめざす者と定義している。

いくら崇高な目的を掲げて、事ははじまらない。その目的を具現化するための目標のイメージを絵や数字に置き換える。そして、それに賛同する人たちが集まり、役割分担、計画を立て、組織をつくり、人々の欲望がより高次元に

なるような制度をつくる。さらに、富の再配分におけるプロセスのなかで、心の進化が促され、意識改革が無意識のうちにこなわれて、未来を担う志をもった思考力豊かな人物が育っていく。これが、事業である。

いま、自然環境と調和がとれ、

条件は「天寿が全うでき、楽しく愉快に生きられる地球社会の創造」をめざし、それぞれの置かれた立場に立って具現化すべく目標を定め、役割を担うこと、と考える。

私は、「飢餓と殺戮の社会」から「天寿が全うできる社会」への移行期を「創業」の時代、そこから次



トンチンカンな消化対策——

西田淑子

節度と思いやりが生まれる継続可能な共生社会へ向けて、新たな事業が求められている。その事業のプロセスを通じて、競争と共生が矛盾なく両立する道筋が生まれてくる。

「守成」の時代

21世紀に共生を許される人間の

の「楽しく愉快に生きられる地球社会」へと歩みをはじめた段階を「守成」の時代と定義している。

地球は、創業から守成への転換期と位置づけられる。東西冷戦が終わり、人類ははじめて、名実ともにそのような段階を迎えた。では、どのような転換が必要なのか。創業の時代には、「霸道」、すなわ

ち武力や権謀術数で国が治められる。そして、この時代は政治家・官僚が主導。対して、守成の時代は「王道」。この時代は、事業活動を通して修羅場を経験した、社会心理学者アブラハム・マズローのいう自己超越実現欲求の段階に達した民間人が主導。

「飢餓と殺戮の社会」から効率的に脱する手段として、霸道は確立されたものである。

派生する犠牲を承知のうえで、人心が物と権力に欲望を肥大化させるよう諸制度をつくることにより、体制と技術が急速に進み、効率よく物に変わり、時に戦いを繰り返すなかで、衣食住の必要を満たし得た社会をつくってきたのである。

とはいえ、戦争に勝って生き残るために必要な理論や手法は、一時的なものでしかありえない。それを平和な時代に永遠のものであるのかとく、大衆を欺くことで、霸道は成立していた。

霸道から王道への転換

一方、王道は永続可能な本音の理論・手法である。

大事なことは、善か悪かではなく、状況が変わったら、理論・手

法を根本的に転換することである。戦後の日本は、大量生産・大量消費の物質万能主義で突っ走り、経済大国となった。しかし、規格製品を効率的に生産することは、戦時経済の優先課題である。それがそっくり戦後にもち込まれたことは、戦争中にだけ通用する一時的な理論・手法を、永続可能なもののように、大衆に錯覚させ続けてきたということである。

私は、日本において、霸道から王道への転換点は、1985年、ドル高修正のために為替市場への協調介入が決まった「プラザ合意」だったとみなしている。しかし、当時も構造改革が叫ばれながら実現せず、そのままバブルに突入し、現在の惨状を招いてしまった。だが、いまからでも遅くはない。ただし、残された時間は少ない。

大量生産・大量消費の20世紀には「物づくりとその普及のための人づくり」が追求された。これを、21世紀には「楽しく愉快に生きられる人づくりのための事おこしと物づくり」へと転換しなければならぬ。「事おこし、物づくり」の過程のなかに感動を甦らせ、「自己本位から他者への思いやりと共生」、「利己主義から利他主義」へ

と、人間の心の進化を促す施策。これが、いま求められる「パラダイム転換」である。

地球ユートピア実験構想

「楽しく愉快に生きられる人づくりのための事おこし」のための具体的事業の場を創出するべく、私は、1期工事5000億円、総事業費2兆円規模の『地球ユートピア実験構想』に向かって、一步を踏み出そうとしている。

すでに、その構想に基づき、4つの具体的なプロジェクトの計画を、出雲において発進させている。

そのひとつが『ヒューマン・テーパービレッジ（理想郷）』プロジェクトで、次のような内容である。

島根県が干陸を予定している中

海・本庄工区を海洋牧場として生かし、環境、食糧、エネルギーなど、人類が直面する危機をいかにして乗り切るかを模索する実験場とする。

バイオテクノロジーと光ファイバーで導いた太陽光により、湖底に堆積しているヘドロに藻類を繁殖させ、「爆発的な生命連鎖」の起る汽水湖として蘇らせる。

さらに、周辺に有機農業田園都市を建設。ここでは、太陽・風力・潮汐などのクリーンエネルギーを用い、少ない水源で農業と文化的な生活を送るための技術開発を進める。

すなわち、「ゼロ・エミッション」21世紀の新しい文化の創造をはかり、広報・企画・設計・建設とい

うプロセスを通じて、心の進化を促し、21世紀の世界を担う人づくりをめざすものである。

志を同じくする個人、良識ある企業・団体が自発的な意思によって寄付、投資を行ない、このビッグプロジェクトを推進。

つまり、従来の公共事業のような手法はとらず、新しい官民の役割を定め、計画を進める。

財政破綻の時代に、公共事業には依存できない。国債の発行は、どういitくろってみても、子孫に借金を残すことに変わりはない。

高齢・少子化が大きな社会問題になっているとき、世代間の分離・断絶はますます深まり、最後には世代間闘争にいきつく。

このプロジェクトは、世代・地

域間の「富の移転」を促し、国内外に山積する諸問題を解決する糸口になると確信する。

戦後、復興期から高度成長時代を経て今日に至るまで、必死に働いた日本人の富が、1200兆円の個人金融資産として蓄積され、そのうち高額資産者約50万人で全金額の7割を占めるともいわれている。

金融ビッグバンにより、世界のために、この資産を国外へ流動させる必要があるが、一部は「楽しく愉快に生きられる地球社会実現」のために海洋国家・技術立国、日本の役割を果たすべく、こうした実験プロジェクトを各地で立ち上げ、投資することが、必要と確信する。

対 小松昭夫・小松電機産業社長 × 渡辺利夫・東京工業大学教授 談

飢餓と殺りくがなく楽しく愉快に持続的に生きられる世界を

—世紀末の世界とアジア・日本の行方を占う—

人類史的課題に挑戦する
「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」
相互信頼に基づく日韓友好関係へ



冷戦崩壊後の混とん状況

——21世紀を目前にして、現状の世界について思うことは。

小松 今年一九九九年は、古くから一つの節目と言われてきた。特に七月には何か大きな出来事があるのではないか、とも言われ、人々の心の中に、ある種の心理的不安をもたらしている。二〇〇〇年のコンピュータ問題など、経済も大きな曲がり角を迎え、コソボ紛争、イラク問題、北朝鮮核疑惑問題などの行方も不透明で、いろんな意味で無気味に思う。

この一年のあいだ、エリツイン大統領の訪日に続いて小渕首相の訪韓、訪米、訪中、そしてクリントン大統領の訪日や訪中、金大中大統領の訪日、訪中、江沢民主席の訪口、訪日など、頻繁に首脳外交が繰り返

小松昭夫

小松電機産業社長

1944年島根県生まれ。島根県立松江工業高校卒。73年、小松産業設立。81年に小松電機産業(株)とする。85年、シートシャッター「門番」を開発・発表する。94年、NHS(人間・自然・科学)研究所設立。ベンチャービジネスの旗手として中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞、科学技術庁注目発明選定証、地域活性化貢献企業賞など数々の賞を受ける。資本金1億円。従業員85人。年商42億円。

げられている。これだけ集中的に外交展開が行われるのは戦後初めてのことだ。注目すべきことだ。今年は非常に重要な年になりそうだとこの予感がする。

渡辺 世紀末という言葉は、リアリティを感じさせる。冷戦崩壊後、誰もが新しい時代が来ると思った。フランス・フクヤマは「歴史は終わった」と言った。ヘーゲルの言う弁証法的な発展史の時代は終わり、「退屈であるが、平和な時代がやってくる。対立の構図はもうない」と言った。ある友人は、カント流の「永久平和の時代」がいにやってきたと言う。

しかし、私はそうした見方はあたっていないと思う。確かに冷戦時代には非常に厳しい対立があったが、二つの大国のはざまにあって、人々はむしろ健康でいられた。それが崩れると、ありとあ

らゆる人種、宗教、カルト集団など、人間の最も原始的な集団へと無限に分散し続けている。その中で我々の理解を超える紛争が続出している。ユーゴスラビアのコソボ紛争は、そのことをシンボリックに示すものだ。

我々は、そうした冷戦崩壊後のわけの分らない状況の中におかれている。そういう不安感があるものだから、世紀末という言葉が妙な現実感で響いてくる。小松社長が述べた二〇〇〇年問題は単なるテクニカルなテーマでなく、何かゾッとしたことが起きるような気がしてならない。

小松 二六歳の時、会社が倒産し、困窮生活をしていた。家族を支え、自分も楽しく生きるためにはどうしたら良いか、悩み苦しんだ。紆余曲折を経た後、第一次オイルショックの時、兄弟二人で事業を立ち上げたのですが、その頃といまでは社会と経営環境ががらりと変わった。

国家経営の面でいうと、飢餓と殺りくのない社会をつくるための覇道の時代から、楽しく愉快に持続的に生きられる社会を創造するための王道の時代への転換をうまくやらないと文明そのものが崩壊する。そのためには現状の問題点を根源的・長期



世紀末——世界は大いに揺れている。戦後冷戦体制の終えんは、必ずしも平和と安定をもたらすものではなかった。民族・宗教・地域紛争の頻発、発展途上国の貧困と飢餓の惨状など、21世紀を迎え人類が解決すべき課題は多い。情報・通信革命と経済のグローバル化で「地球村」が形成されつつあるが、国境を越えた「共生社会」にはほど遠い。果たして、世界はどこに向かい、アジア・日本はどう進むべきか、既成の企業概念を乗り越え、「地球ユートピアモデル事業」に取り組む小松電機産業・小松昭夫社長とアジア経済の碩学である東京工業大学・渡辺利夫教授に語り合っていた。 (司会は本誌主幹・姜 英之)

的・多面的に考えるということだ。具体的には、環境問題は地球誕生・生命誕生から、社会問題は人類の特性・人間の定義から考えれば道筋を見出すヒントが見えてくる。そういう考え方の中から、私は現在の事業において社是として「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」、そして経営理念として「おもしろおかしく たのしく ゆかいに」を掲げ、いま「出雲から日本を変える」という発想で「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」構想に取り組んでいる。

たとえばその中の一つに「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・穴道湖圏域の新構想)」があります。これは地元の島根県が干陸を予定している中海・本庄工区を情報微生物工学などの先端技術を駆使して、爆発的生命連鎖のマリンランドとして生かし、周辺にはエネルギー農業田園都市を建設するなど、環境、食糧、エネルギーなど、人類が直面する危機をいかにして乗り切るかを模索する実験場なんです。天寿が全うでき、人々が楽しく愉快に持続的に生きられる社会を造るという目的に向けての第一歩と思っている。

持が強い。私は、日中環境協力の専門委員会のメンバーとして、何度か中国の環境調査に出かけたのですが、中国側の委員の中で、私席の場で「中国は環境によって滅びるだろう」とまで吐露する人もいた。そこまでひどいのか、という感想をもちました。これはただ中国だけの問題でなく、地球全体について言えることであり、非常に世紀末的な、恐ろしい気分させられたわけです。

危険な国家主義へのリアクション

——日本はどこまで国際化したか。

小松 島根は古来より朝鮮半島とつながりが深く、シルクロードの上陸地でもありました。ある人が、日本人は渡来人を受け容れ、民族の和合が進み、世界の中で最も遺伝子レベルで混血が進んだ民族だと言った。その過程で、文化・経済交流が進み、一つの文明圏をつくってきたという背景があると思う。

私は、地政学・歴史的にみて、世紀末の混沌としたいま、シルクロード文化の執着点・発信源でもあり、醸成された独特の日本文化が人類の未来のために、何か大きな役割を果

渡辺利夫
東京工業大学教授
1939年、山梨県甲府市生まれ。慶応義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授を経て87年より東京工業大学教授(開発経済学、現代アジア経済論)。アジア政経学会理事長(前)。著書に「成長のアジア 停滞のアジア」(東洋経済新報社、吉野作造賞)、「開発経済学—経済学と現代アジア」(日本評論社、大平正芳記念賞)、「西太平洋の時代—アジア新産業国家の政治経済学」(文芸春秋、アジア太平洋賞・大賞)など多数。

たすべきときがやってきたのではないかと思います。

渡辺 まったく同感ですね。日本は海に囲まれた島国で、大和民族が同一種族を維持しつづけ世界性がないと思われていますが、それはウソで、我々がそう教え込まれたか、歴史学の未発展のせいにすぎない。遺跡が次々と発掘され、歴史の読みかえ作業が随分進んでいる。それから、日本が大変古来より世界性をもっていたことが実証されている。

最近の歴史学会では、新しい見解が現れている。ある歴史学者は、江戸時代の山間僻地にあったような所が非常に世界性をもっていたことを実証している。例えば、今まで辺境とみなされていた能登半島が日本海の交易の機能を担っていたということです。日本が島国で、海にロックされた絶海の孤島であるといったイメージは間違いです。こうした歴史の実証の積み重ねで、日本の文化がもともと持っていた世界性がついに明らかにされ始めた。

ところが、現代は逆に自国以外に関心が低い。極めて非国際的だ。明治は非常に国際的時代だった、開国維新のリーダーたちは外国に行った



こともないのに外国のことを考えない国が減びるという意識をもっていた。それにいまは、公の概念が薄れて、私に埋没している。国際から非国際的、公から私への潮流をいかに食い止めるかは文明史的課題でもある。

すでに日本は周りからは、経済大国、軍事大国と見られ、国際化しているのだ。非国際的思考と気分だけ私といった方向に向かうと、いざ何か起きた時、一気に「国家主義」にスウィングしてしまわないか心配だ。

小松 それと関連して言えば、トヨタの社長が言っていたことが思い出される。トヨタがここまで発展した理由として、日本が海に閉ざされて

いるのではなく、世界の自動車需要に応える、いわば海に向かって開かれていたことだと答えたんです。本当にそうだと思うんです。日本のことだけを考えて生きられる時代ではなく、いまやアジア、世界を視野に入れ、人類の抱えている課題に立ち向かっていかなければならないと思います。

私は渡辺先生のおっしゃるような国家主義へのリアクション、いわば昔のような軍国主義の道に行くような危険は絶対に犯してはならないと思います。もし、そうなれば先にたたかれ、滅亡ですよ。そうではなくて、日本は世界の国の果たしえない役割を果たすことが重要だと思えます。そうすることで日本を生かすことができますし、それは人類のためにも必要不可欠のことだと思います。そういうロジックをきちんともってこそ、日本のアイデンティティを確立することができる。

戦後残された課題を解決せねば

——朝鮮半島との関わりについて。

小松 二〇世紀は戦争の歴史であつた。第一次と第二次大戦、戦後の朝鮮戦争ですね。この三つは、どち

らも二つのブロックに分かれて戦った戦争で、朝鮮戦争は多国間の最後の組織的戦争だった。それによって朝鮮半島の分断も固定化し、日本との関係も不安定なものになった。朝鮮半島は人類最後の総力戦があった場所であり、また戦後は日韓紛争の島として竹島（韓国では独島と呼ぶ）があるが、この島に地球共生・縁むすびの像を建立するための議論を起こそうと提案した。この議論の中から世界平和への道筋が見えてくることを願うことです。

それと、最近話題になっている北朝鮮問題ですが、北朝鮮がいまのよように孤立しているのも、かつて日本による植民地支配にさかのぼる遠因というものを考えなければならぬ。また北朝鮮には、中国残留孤児と同様、多くの残留孤児がいると思われる。戦時中の朝鮮人への強制労働に対する補償の問題もある。そうした問題に対して、日本は戦後きちんと相手の個人レベルまで対応してこなかった。いまそれらの問題に対し、きちんと過去を見つめ直し、それを戦後の残された課題として、非常に重要なものとしてすみやかに議論を始め、結論を出し、実行することが何にもまして重要だ。このまま時間が経過することは大きな罪であ

る。「過去を忘れる者は、過去を繰り返す危険がある。過去を思い起こす者は、世界平和に新しい勇気を与える」。これはドイツのワイツゼッガー前大統領が、一九九九年四月に来日された折、長崎の原爆資料館で記帳された言葉です。「地球ユートピアモデル事業」は、そうした視点から一〇年の歳月を経て生まれたものです。

渡辺 いま指摘されたことは、なかなか難しい問題ですが、やはり日本人として取り組んでいかなければならない問題だと思います。ただ、北朝鮮の問題は、国交もなく、政策的に有効な論議ができていないのは残念なことです。いずれにしても日朝国交正常化のとりが開かれることが期待されます。

他方、日本と韓国の関係について言えば、ついに新しい時代がきたのかなあ、という気がする。私は七〇年代から、韓国に対し関心をもち、もう三〇年近くなります。しかし、その間、個人的なおつき合いは別として、どうしてこうもうまくいかなかったのかなあ、とずっと思ってきた。しかし、いまや、これからは日韓関係は本格的にうまくいくかも知れない、と思います。三〇年のあいだ、初めての感覚です。金大中大統領の

対日友好的な姿勢は、やはり国民がそうさせるだけの力をつけてきたことの反映だろう。文化開放政策は画期的であり、日韓自由貿易協定の提案も出てきた。

ただ、日韓協力という場合、お互いに向き合った二国関係よりも、第三の対象に両国が顔を同じ方向に向けて協力しあう方がうまくいくのではないかと思っています。

マルチの中での 日韓協力関係を

小松 私もまったく同感です。両国関係を考える時、まずこれまでは国家の枠組みというものの正当性とは

何かが論じられてこなかった点を指摘したい。飢餓と殺りくのない世界をいかに効率的に造り出すか、その方法論の差異に国家の正統性の根拠が求められると思うんです。

二〇世紀は、競争とか協力、ハイテクノロジーを使った戦争の時代だった。科学技術の進歩がすごかった。大量の商品を作れるようになったが、自然との循環の面で環境破壊など、多くの弊害が出てくるようになった。そして食糧問題、エネルギー問題も出ています。「地球ユートピアモデル事業」は、まさにそうした問題解決のため、先端技術と自然との高次元での融合を目指している。

そうした国家の新しい理念の下に、日韓両国の友好と協力についても考え直す必要がある。日本と韓国の協力は、経済問題だけでは解決が難しい。また、二国だけでなく、北朝鮮、中国、ロシアも含め、それらの国々とのトータルの中で日韓両国の役割分担をしながら協力していくべきですね。その点、それら五カ国が共同して推進している「豆満江開発」は極めて注目される。それに対しては、地球全体から飢餓と殺りくをなくするため、地政学的に、またそこに住む民族の立場をふまえ、お互

いの役割を果たしていくことが重要だと言いたい。

渡辺 日韓協力は、もはや二国間だけでなく、アジア全体を見据えた上での協力関係へと発展させる時期にきているでしょうね。例えば、日韓自由貿易協定といった場合、日韓だけでそれをやれば、結果はうまくいかないと思う。韓国の輸入多辺化政策の下で、対日輸入制限がある中で自由貿易協定はとても無理です。

協定そのものは良いことですが、それがうまくいかない場合、失敗のコストを誰が支払うか、という点、やはり両国だ。すると、これまで築いてきた協力関係が二〇年前にもどってしまふことになる。だから、やはり小松社長も指摘された通り、日韓だけでなく、周辺国とも一緒にやっていくことが両国の良好関係を保つ鍵だと思う。

先ほど述べた、日韓が第三の対象に向けて協力するということについて言えば、建設、道路、港湾、鉄道、橋梁などインフラのテクノロジーは韓国が高いものをもっている。また、その方が発展途上国にとつて役立つものだ。しかし、まだODAの経験とノウハウが少ない。そこで韓国がそうしたテクノロジーを出し、日本が資金やノウハウを出



して日韓協力して、中国や北朝鮮の開発をやるということであれば、うまくいくと思う。二〇〇二年サッカー・ワールドカップは、世界に向けた日韓の共同事業だけに、これを何とか成功させてもらいたいものです。IMF体制下で経済事情が苦しいこともあって、韓国のサッカー場建設に日本が円借款すると決めたそうだが、円借款の対象としてはやや問題があっても、日韓両国の協力関係を強化する上では、とても有効だろう。いま、アジアは通貨・金融危機でこれまでの成長パターンに懐疑がもたれているが、優れた労働力と勤勉、貯蓄など、成長潜在力は依然として大きく、その将来性は明るい。日本と韓国が共同でリーダーシップを発揮して、アジア全体の経済発展につなげていくことが望ましいですね。

ローカルからグローバルへ

——「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」の具体化について。

小松 企業経営をする中でずっと考え続けてきたことは、現代は科学技術の進歩の反面、地球環境の破壊で人類の生存を脅かすようになってい

るということでした。この現実に対する危機意識がつのり、何とかいまだ人類が解決していない飢餓と殺りくのない社会をつくるにはどうすれば良いかと考えてきたんです。それをなし得た国は「楽しく愉快に持続的に生きられる社会」をつくるため、社会の枠組みを変革しなければならぬ。そのためにはパラダイムシフトが必要で、その目的の下に構想されたのが、「太陽の國出雲——

地球ユートピアモデル事業」なんです。

先にも述べたように、出雲は古来より「縁むすびの国」とされ、特に朝鮮半島とは密接な関係があった地です。出雲の歴史的・地政学的な意味に照らして、この土地の果たすべき役割、使命に気づき、出雲こそ過去から未来に向かう歴史的な時間軸に沿ってパラダイムシフトを目指した実験を行うのにふさわしいと思った。出雲発の日本の構造改革、いわばローカルからグローバルに向かうプロジェクトなんです。

その構想の具体的内容は心のインフラ整備——①人縁・感謝と戦争の歴史記念館、②心の首都（松江市市街地再開発構想）、③環境問題解決のため、ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・穴道湖圏域の新構想）、④未来を拓く教育・研究機関です。今日の人類が抱える最も大きな問題である相互信頼関係の喪失という社会問題と環境問題を解決する糸口を見い出すためのものであり、世紀末の閉塞感を打破し、人類の新たな歴史の第一歩につなげることを目指している。

私が特に強調したいのは、小



渚首相の掲げておられる「徳のある国」をめざす上でも「心のインフラ整備」が重要ということですね。過去の戦争に関しても被害国・加害国となった背景・原因・経緯を調査・研究する中で未来志向で昇華し、関係諸国の人々との信頼関係の回復と、世界の平和と繁栄に資する、人類にとつて最も貴重な知的共有財産を構築する。これは、先輩のつくった文化と資産を継承し、昔に比べればはるかに高い水準で、いまを生きる我々の義務と責任である。そのために「記念館建設を」、また、金大中大統領の訪日によって、新しい日韓関係が開かれたことを契機に、「地球共生・縁むすびの島——竹島」独島にモニュメント建設を」という構想を提案しました。これをきっかけに、多くの人々の議論の輪が広がることを期待したい。

渡辺 非常にスケールの大きい、理想に燃える夢のある事業ですね。ぜひ、成功することを願っています。私も、東アジア、特に漢字文化圏の人々とは長いおつき合いがあり、ヒューマンネットワークをもっていますので、何かお役に立てばと思います。

——長時間ありがとうございました。

HNS研究所 『太陽の國 IZUMO』

HNS研究所の「太陽の國 IZUMO」(税込2500円)が、刊行された。地域への関心を高め、地域の歴史を、関係の新聞雑誌記事なども引用して大観した後、山陰地域の歴史、地勢的な背景と特長を明らかにしながら「心の首都(松江市市街地再開発構想)」「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・宍道湖圏域の新構想)」など地域づくりの具体的な処方せんを描く。

しかもこれは社会評論家や宗教家、あるいは行政が書いた本ではない。地域で、地域とともに、未来を創る者たちが、大宇宙を生きていることを命題としている企業が、ユートピアのモデルとして山陰を選び「太陽の國 IZUMO」と名付けて、二十一世紀のこの地方の理想的なありようを、具体的に示したものである。

もちろん空想、空論ではない。「今日、世界は環境破壊と地域紛争の多発によって人類破滅か、それとも共通の目的を見いだして確な役割分担と合意形成の中から、みんなが心豊かに生きて天寿を全うできる地球社会を創造できるかの岐路に立たされている」との現状認識は、多少皮相的だとしても異論を容れざるを得ないだろう。そして本文で「太陽の國 IZUMO」の目的「人類と人間」「いま

地域づくりの具体的な処方せん提示

地球は「何をなすべきか」と章分けて人類が歩んできた歴史を、関係の新聞雑誌記事なども引用して大観した後、山陰地域の歴史、地勢的な背景と特長を明らかにしながら「心の首都(松江市市街地再開発構想)」「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・宍道湖圏域の新構想)」など地域づくりの具体的な処方せんを描く。

本書を出版したHNS研究所は、シートシャーターと水などの浄化プラントメーカーとして知られる小松電機産業(本社松江市)が、人間・自然・科学という極めて今日的・哲学的テーマを追究するために設立した機関で、本書は主として小松電機社長の小松昭夫氏自身が執筆したもの。

HNS研究所は「一村一志運動」を提唱、これまでに江戸時代末、独力で島根県八雲村の切り通しを開削し、恒常的だった意平川の氾濫は(さん)をなくした伝記「須藤弥兵衛」同じく宍道湖の氾濫から松江を救うため佐陀川を開削した「清原太兵衛」などを出版しているほか「中海本生区の未来構想シンボ」「緑むすびシンボ」などユニークな公開会議を開催。

今年も十月三十日、松江市のくにびきメッセで、環境微生物学の権威・高橋康彦博士らを招き「千年記念事業太陽の國 IZUMOシンボジウム」を開く。

(中)

1999年10月 日刊工業新聞

■ 混沌状況を打破し 国際共生社会を

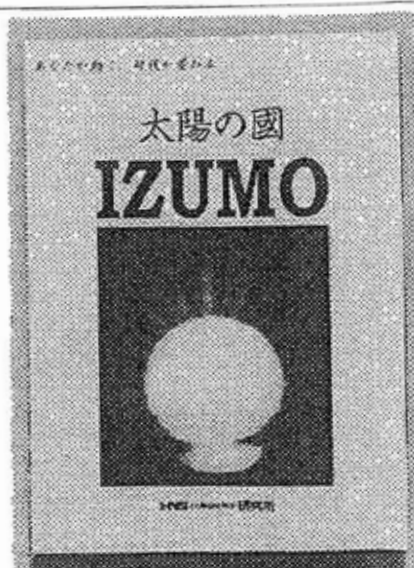
【松江】小松電機産業社

長でHNS(人間・自然・科学)研究所(松江市乃木福富町、0852・32・3636)所長の小松昭夫

さんが、21世紀の地球のあり方を提案する「太陽の國 IZUMO」(A4判、154頁、2500円)を発売した。

著書は現状を混沌の世紀末と指摘し、この状況を打破するため国際共生社会を提唱、そのための具体的な

プランを提示して「心のインフラ整備」「感謝と戦争の歴史記念」「心の首都(松江市市再開発構想)」「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・宍道湖圏域の教育機関)」に4大別、地方に当てはめて事業提言している。10月に演会も開催する。



長小松HNS研究所の
が刊行した「太陽の國 IZUMO」

米子、松江、出雲の3市

環日本海交流拠点に

国土審

第4次
中国地方
開発計画案まとまる

国土審議会（首相の諮問機関）の中国地方開発特別委員会は十八日、第四次中国地方開発促進計画（目標年次二〇〇一―二〇一五年）案をまとめた。大小の

都市が東西南北に分散する中国地方の特徴を生かした「多軸・分散ネットワーク型発展」を目指し、長期的に日本海、西日本両国土軸を形成する。三月中に閣議

決定する。

第五次の全国総合開発計画を受けた同開発促進計画は、今後の中国地方の自治体の施策に反映される。計画は①分散型都市が連

携②多自然居住地域の創造③産業集積を生かし創造的産業社会へ転換④世界に貢献し交流する中国―を重点課題とし、四国地方と密接に結びつく「環三海二山交流圏」の可能性にも着目した。

都市間の連携促進では、規模に応じた役割分担を提示。瀬戸内海側は広島圏、岡山・倉敷圏が中枢拠点となり、東広島、呉、岩国市などの近隣都市圏と機能分担を図る一方、松江、米子、出雲市を「環日本海交流」の拠点とする方向を打ち出した。

こうした多軸・分散ネットワーク型発展のため、山陰自動車道、中国横断自動

車道などの整備を進める。関門海峡道路構想は、周辺への影響や費用対効果などを検討する。

産業面では、自動車、造船、セメントなどの産業集積を生かして構造転換と高度化を図るべきだと指摘。地域産業や中小企業の活性化のため、松江市のソフトビジネスパークなどを整備し産業・研究拠点を形成。新産業創出や新規分野への展開に向け、産学官のネットワークを整備する。

関西文化学術研究都市にある財団法人国際高等研究所では、「何を研究すべきかを研究する」ためのユニークな学際的共同研究を実施している。私も、「人類の自己家畜化現象と現代文明」という課題のプロジェクトを3年間お世話し、このたび無事終了することができた。

自己家畜化という概念は、ヒトの身体に野生動物とは違い、むしろ家畜に似た点があることに注目したドイツの人類学者によって、1930年代に提唱された。その基本には、ヒトが「文化」によって作り出した環境への適応を通じて、「自己」をあたかも家畜のように管理し、変えてきたとの考えがある。

われわれは、少々どぎついこの表現が、メタファー（隠喩）として現代文明下のヒトの危機的状況を理解する切り口になると考え、自然科学から人文・社会科学にいたる広い範囲の研究者を集めて共同研究を行った。

ヒトとペットを含む家畜の

人類の自己家畜化に――考察

現代文明の危機にどう対処



尾本 恵市

おもと・けいichi 桃山学院大学教授（人類学、人類遺伝学）1993年東京都市大学文学部教授。著書に「分子人類学と日本人の起源」「ヒトはいかにして生まれたか」文化研究センター教授を経など。

間には多くの共通点がみられる。ヒトとサル、フタとイノシシ、イヌとオオカミのように、近縁の野生動物と比べると、ヒトと家畜の間には、歯やあごの縮小や異常、運動機能や免疫力の低下などのほ

性の衰滅」「遺伝的な頑固性」「伝統の破壊」「教化されやすさ」「核兵器」をあげた。今日、わが国で憂慮されている環境破壊、健康への不安、家庭の崩壊、こどもの教育などの大きな社会的問題はすべて

化の特殊性などを踏まえた総合的な取り組みの姿勢が欠けているように思う。英国の生物学者ジュリアン・ハックスリは、60年代に書いた本でヒトの未来を予測している。彼によれば、宇宙の

断にもとづく文化による適応という過程が含まれる。そして、ハックスリは、自己を認識するヒトのみに可能な第4の進化過程として「自己規制する進化」をあげている。

そして、人類の歴史からいえば、ごく短い過去1万年以内の間に「文明」を発展させ、一方的に人口増大を続けた。しかし、この間にわれわれの行動の基礎となる遺伝的プログラムは基本的に変わって

矛盾の中にある。むしろ、われわれは野生の昔に帰することはできない。われわれの未来もまた科学技術文明に頼らざるをえない。現今のパウル経済の教訓は、考えてみれば、文明化したヒトそのものにもあてはまる。文明はヒトをあまりにも傲慢にした。あくなき利己的な利益追求競争の結果が地球規模での破綻につながらないと、だれがいうのであるのか。

多くの宗教が「神」という絶対的な存在を想定したことは、人間の傲慢さを諭す知恵であったろう。今われわれに必要なことは、社会や産業、家庭や教育の仕組みの中心に、いかにして地球的・人類的見地からの「自己規制」という鍵概念を取り入れるかを早急に検討することである。もし、環境破壊や教育問題で痛い経験をした日本が、先進工業国の中で率先してこのことに取り組むなら、将来世界史の中での日本の評価が変わるに違いない。



【ハルビン(中国黒竜江省) 30日 共同】日中戦争時にペストなどの細菌兵器開発のため、中国人捕虜らの人体実験を繰り返した中国ハルビン市郊外の旧関東軍防疫給水部(七三一部隊)本部の跡地「写真Ⅱ」で五月初めから、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界遺産登録を目指す保護、復元工事が本格的に始まった。

人々に知らせ、中国の愛国教育にも役立てることが狙い。二階建てれんが造りの本部棟は中学、高校の校舎として使われているが、学校を移転する計画という。地元の柳昌黎・平房区長は三十日、

731部隊跡 世界遺産に

中国で 日本から訪れた支援団体の復元工事

代表団(団長・栗原透元高知県議)を前に「ナチス・ドイツの強制収容所、アウシュビッツ(ポーランド)や広島原爆ドームに続く戦争遺跡の世界遺産化に向け努力したい」と述べ、意欲をみせた。